白紙の地図と高校生のＰＧＣ ～half red eyes～

白凪 黙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白紙の地図と高校生のＰＧＣ　～ｈａｌｆ　ｒｅｄ　ｅｙｅｓ～

【Ｎコード】
Ｎ７６７５Ｙ

【作者名】
白凪　黙

【あらすじ】
２０５５年。
世界の地図は白紙に帰った。
終わりの見えない不況が、第３次世界大戦を引き起こしたのである。
連合も同盟も無い己の利権のみを求めた２０５０年から約５年にも及んだ大戦は、世界各国と国境を消し去った。
終戦から約２０年後の２０７５年。
第４都市と言う名に変わった日本ーーーの極々一部は、先の大戦で

権力を握ったＰＭＣ（民間軍事会社）に因って、統治されつつあった。

だが、ＰＭＣが権力を握る前。崩壊していたかつての日本の治安を守っていたのは、ＰＭＣと同時期に設立された、ＰＧＣ（民間警備会社）だった。

これは、かつての日本のとある街ーーー半径十キロの世界の中で様々な思いを抱くＰＧＣの少年少女達の物語。

第1話　プロローグ1（前書き）

初めまして。
白凪　黙と申します。
このような形で、小説を掲載するのは、初めてで、駄文かも知れませんが、生暖かい（？）目で見守って頂けたら幸いです。
尚、私は学生ですので、考査などで更新が遅れる場合がございますが、ご了承下さい。m（__）m

第1話　プロローグ1

「ーーハァ、ハァーー」
夜の闇に沈む閑静な住宅街。
その街中を息が切らしながらも少女は走っていた。
少女を動かしている原動力。
それは『恐怖』と言う名の感情と死にたくない、と言う思いだった。
その二つが今にも立ち止まってしまいそうな少女を必死に支えている。
後ろを振り返ると追手はーーー刃物を持った男は、まだ少女を追い掛け続けていた。
「なん、で…」
何かをした訳でも無い。
何時も通りの日常だった。それなのに、何故。
自分が、『通り魔』の餌食として選ばれてしまったのか。

走って、走って、走って。辿り着いたのは、行き止まりだった。
行く手を阻む壁は防犯意識が強いのか、異常に高く、乗り越える事は、少女に取って、不可能に近い。

こんな結末を、運命を、少女は呪った。
壁にもたれて座り込んでしまった少女に男が近寄って行く。
死に間際の走馬灯。
その言葉が本当で有ったと、少女は身を持って体験していた。
僅か十数年の人生。
その一コマ一コマが、ゆっくりと流れていく。
男が刃物を持ち直したのが見えた。
少女は目を固く閉じ、来るべき『死』に備えた。

ーーー数瞬の後。
辺りに紅の飛沫が飛び散った。

第1話　プロローグ1（後書き）

コメントなど頂けたら嬉しいです。

第2話　白紙となった地図

初春にしては冷たく感じる、屋上の乾いた風。
その風に髪を揺らされ、風見一希はうっすら目を開けた。
一希は立ち上がり、体を反らす。パキポキと鳴る体は、長い間一希が其処に座り込んで居た事を示していた。
日の光を吸収しているかの様な漆黒の髪。
制服に身を包んだ体は、高校生にしては、背丈が高めだった。
一希はゆっくりと柵の側に歩み寄る。
この高校ーーー私立月下高校の屋上からは、街が一望出来た。
否ーーー街、ではなく世界、か。
半径１０キロの円を描く壁。その中の街が、一希に取っての世界だった。

今から約２５年前。
まだ、一希も生まれていない頃ーーー
世界を巻き込んだ最後の戦争が有った。
第３次世界大戦。今ではそう呼ばれている。
事の発端は、たった一回の発砲だったらしい。
テロ行為が激化していた中東、其処のテロリストが治安部隊に対して行った威嚇射撃が命中。
それが発端となったテロリスト対治安部隊の戦いは泥沼化。
次第に戦火は中東各国に飛び火。
いつの間にか、テロリスト対治安部隊の戦いは国家対国家と言う状態となっていた。
普通ならば、この辺りで国連か何処かの機関が仲介し、終戦へと戦局は向かっていっただろう。
だが、そうなる事は無かった。

中東での戦争に乗じ、中国、ロシアがあらゆる利権や資源を求め、アメリカ、東南アジアに侵攻した為だった。

２００８年頃に起こった金融危機。それは、一時的に収まったものの、完全に収まる事は無かった。
更に、中東で戦争が始まった事で、只でさえ少なくなっていた石油などの資源が枯渇。
経済的な利権・資源を求め、戦争が勃発するのも、無理は無い状態だったらしい。
そして、それに続くかの様に、アジアは勿論、南米、北米、アフリカ、ヨーロッパ…あらゆる国が、互いに宣戦布告し、第３次世界大戦が始まった。

日本も例外では無かった。各国の軍隊の前に自衛隊は壊滅。民間人軍人問わず、死者は計り知れない。
大戦は始まって約五年で終結したが、別に各国が自らの愚行に気が付いた訳では決して無い。軍資金・兵力の消滅、他国の侵略に対する全面降伏、そして、戦略型核兵器の使用など様々な要因で、戦争を行う国家自体が消滅してしまったからだった。
家族や住む場所を失い、生き残った人々は、二度とこのような事を繰り返さないように、と２０５５年に互いに永世中立を誓い、自衛力以外の一切の武力を放棄した。そして、世界各地にーーー核兵器の影響が比較的少なかった場所にーーー五つの都市を作りそれぞれに第１～第５と都市に番号を割り振った。

国境が消え、世界地図が白紙になった瞬間だった。

だか、国境が消えたとは言っても、集団には、統治者が必要だった。人に人は支配出来ない、とは良く言った物だが、統治者が必要というのは、なんという矛盾だっただろうか。かつて日本であった場所

に位置する第４都市の支配権を手に入れたのは、自衛隊が壊滅した後、日本を辛うじて壊滅から守りきったＰＭＣだった。ＰＭＣに因って統治されている日本ーーー第４都市の治安は、表向きには、ＰＭＣが統治しているからこそ、治安が保たれていると一般人には思われている。

そう、表向きには。

都市を眺めて居ると、ズボンのポケットに入っていた携帯が震え出した。一希は携帯を取り出すと、ディスプレイを一瞥、受話器のボタンを押して、耳に当てた。

「ーー何だよ、舞無（むな。）さん。」

『久しぶり、一希君。元気？』

その声には、僅かな笑いが含まれていた。

「舞無さんの声聞くまでは元気だったよ。」

聞くまでは、を強調し、一希は答えた。

『……まあ、そんな事はどうでも良いわ。それで。』舞無の声色が変わった。

例えるならば、冷たく冷えきった、鋭利な刃物。

「『依頼』か？」

それに合わせ、一希も声のトーンを落とす。

「そう。急で悪いと思うけど、今から事務所に来てくれない？」

「分かった。今から行く。」

一希は通話を切った。

そして、鞄を手にするとーーー

柵を乗り越え、屋上から飛び降りた。

第2話　白紙となった地図（後書き）

テスト期間中に、小説書いて投稿する私は異常…？
感想など有りましたら、宜しくお願いします。

タイトル修正のお知らせ
「白紙の地図と高校生のＰＧＣ」
へと、近日中に変更します。
ご迷惑をお掛けし、申し訳ありません。

第3話　事務所～依頼～（前書き）

遅れてすみません。
今回はちょっと長いのと、考査期間なので遅れました。

第3話　事務所～依頼～

落ちていく。
制服の裾が風で暴れ、耳を風切り音が支配した。
屋上から地面までの距離は、十数メートル。
その高さから飛び降りたのだとすれば、只では済まないだろう。
だが、一希の顔には焦りや恐怖などは、浮かんで居ない。
地面まで数メートルを切った所で、一希は足を曲げ、衝撃に備えた。

ーーーダンッ

数秒後には、一希は土埃に巻かれながらも、平然と地面に立って居た。

第四都市は大まかに六つのブロックに区分されている。
主に行政機関が集まる中央のブロック。
商店が集まる東のブロック。
農場が広がる西のブロック。
住宅街の南のブロック。　工業地帯の北のブロック。
そしてーーー今、一希が歩いている、繁華街の北東のブロック。
別名『捨てられた街。』。
このブロックだけには、第四都市の統治者であるＰＭＣも関わろうとしない。　だが、第四都市の嫌われ者達や、何らかの事情で、身を隠して居る者達が集まるこのブロックは、他のブロックに比べても、明らかに活気に満ちていた。
一希は五月蝿い雰囲気は好きではない。
だが葬式の様な、重い雰囲気も嫌いだった。
静か過ぎず、五月蝿すぎずーーーそれが、一希の最も好きな雰囲

気だった。

北東のブロックに入り、歩くこと数分。

一希は、三階建ての雑居ビルの前に居た。　ビルの壁面はひび割れ、仮に地震が来たら、数秒で倒壊してしまいそうだった。

正直、この中に入る事に一希はかなりの躊躇いが何時も有ったが、今では気にしない様にしていた。

だから、入り口の階段に足を掛けた時、頭上から僅かにコンクリートの欠片が混じった埃が降ってきても、一希は気にしなかった。

否、気にしたくなかった。

二階に上がると、壁の雰囲気に全く合っていない扉が有った。

扉には、筆記体で『Ｔｕｋｉｓｉｔａ　Ｐｒｉｖａｔｅ　Ｇｕａｒｄ　Ｃｏｍｐａｎｙ』と綴られていた。

今にも倒壊しそうな、雑居ビルの二階。

此所が、一希が所属するＰＧＣの事務所だった。

扉を開けると、一人の少女が、デスクの上で書類を広げていた。

「案外早かったわね、一希君。」

書類から目を離し、一希に目を向ける月下高校の制服を着た少女。

彼女こそが、一希の雇い主であり、月下民間警備会社の社長、月下舞無。

因みに、舞無の祖父は『月下』と言う名字の通り、一希達が通う私立月下高校の理事長だ。

舞無自身も生徒会長の地位に就いて居る。

「舞無さんが早く来いって言うから急いで俺は着たんだが。」

肩をすくめ、一希は事務所の隅に置いてある自分のロッカーを開く。

その中には、防弾チョッキ、拳銃など、この仕事には欠かせない物が詰め込まれていた。　ロッカーは全部で三つ有ったが、使われているのは、二つだけだった。

「で、依頼って何だよ。また、殺し合いか？」　実際、これの一つ前の依頼が、ヤクザの掃討だった。
「違うわよ。何時も何時も、そんな血生臭い依頼ばかり受けたりしないわ。」　それを聞いて一希は、自分が銃を使う必要が無かった依頼は何れ程有ったかを思い出そうとしたが、止めた。
そんな事、指で数えられる程しか無かったからだ。　如何わしい視線を舞無に向かって照射していると、突如、何の合図も無しに扉が開いた。
刹那ーーー
一希は、拳銃をホルスターから抜くと、銃口を扉に向ける。
この事務所に来る人間は多くない。　もし仮に依頼人であったなら、扉の脇に有るチャイムを鳴らすか、ノックをしている筈だ。
一希が、チャイムを鳴らしたり、ノックをしなかったのは、予め舞無に呼び出されて居たので、舞無が来訪を知っていたからだ。
となると、敵か味方か。　当然だが、一希は恨みを買わずに今まで生きてきた訳ではない。
ＰＧＣと言う職業柄、何時鉛玉が飛んできてもおかしくないのだ。
だが、今回扉の向こうに現れた答えは、後者だった。
「……随分、物騒な歓迎ですね…」
その声と姿を認知した瞬間、一希は脱力し、銃口を下げた。
「舞無さん…どうして、雪華さんも来ると言ってくれなかったんですか…？」　扉の向こうで困惑した表情で立って居たのは、一希と同じく月下民間警備会社に雇われて居る、彩萌雪華（あやめせつか）だった。　月下高校の制服を着て、長い髪を後ろで束ねた彼女は狙撃銃を背負っていた。
「いや、今から言おうと思ってたんだけど…来るのが予想外に早かったわ…」　呆然とする舞無を尻目に、狙撃銃を下ろした雪華は、小型のアタッシュケースを床に置いた。
「これが、今回の報酬です。」
ケースを開けると、札束が、二つーーー２００万円程入って居た。

「…ああ、有り難う、ご苦労様、雪華。」
混乱から回復した舞無がそう言うと、雪華は窓枠に腰を下ろした。
一希も、近くの椅子に腰を下ろす。
「さて、今回の依頼は、護衛よ。」
二人が座るのを待って、舞無が切り出した。
「護衛、ですか？」
雪華が意外だと言う様に聞き返す。
「ええ。最近、女子高生が通り魔に殺されていると言うニュースを聞かない？」
「ああ…」
そう言えばそんな事を聞いた事が有る様な気がするな、と一希は思った。
「…でも、何で一希さんと私の二人が呼ばれるんですか？護衛なら、狙撃銃しか扱えない私より、拳銃が扱える一希さんの方が良いんじゃないですか？」
「それなのよ。」
舞無は溜め息を吐き、続けた。
「これが民間人からの依頼だったら、ね。」
「その言い方は、まさか…」
一希には、嫌な予感しかしなかった。

「ええ、今回の依頼人は、ＰＭＣよ。」

第四都市の治安は、ＰＭＣが守って居る。
一般人の常識は、そうだ。
それは確かに嘘では無い。
実際に、殺人事件等の捜査を行うのは、ＰＭＣだ。　だが、稀に、ＰＭＣが手に負えない犯罪が発生する事も有る。
そんな時、ＰＭＣは、多額の金で、密かにＰＧＣに依頼をする。
否、依頼をする、と言うよりは、丸投げする、と言った方が正し

いか。
依頼の内容は様々だ。
今回の様に、護衛をする事で、次の被害を食い止める為の物や、明らかな殺戮行為等のＰＭＣが出来ない『黒い』仕事等々…
少なくとも、全て命を賭ける必要が有る仕事ばかりだった。
そして、仮にＰＧＣの人間が依頼の最中、犯罪者等を逮捕したとしても、一般に知られる事は無く、全てがＰＭＣの手柄としてマスコミには、伝達される。
ＰＭＣに因る第四都市の統治は万全だと、知らしめる為に。
その代わりと言うのも何だが、ＰＧＣの社員には、銃器の所持、使用等の、多くの権限が与えられていた。
人の殺害、と言う一点を除いては。

「つまり、ＰＭＣが依頼してきたから絶対に失敗する事は出来ない。だから、念には念を入れて、俺と、雪華さんの二人にこの依頼に取り組んで貰う…そう言う事ですか？」
「流石ね、一希君。物分かりが良くて助かるわ。……なら、二人共、明日から此れで頼むわ。」
妙な早口と共に差し出されたのはーーー制服？
いや、只の制服だったらまだ良い。
それは、男子の物と形状が多少異なっていて、下は……スカート？
「あの…もしかしてこの制服って…？」
雪華が恐る恐る問う。
それに対して舞無は、わざとらしく視線を反らした。
だが、一希は逃がさず舞無を追撃する。
「女子高の制服ですよね。」
それは、月下高校の姉妹高校、逆瀬女子高の制服だった。
「……安心しなさい。……只だったから。」
遠い目をしながら舞無は言ったが、勿論そう言う問題では無い。
「舞無さん。…俺、男なんですが。」

「そのくらい、見れば分かるわよ。」
即答だったものの、声は僅かに小さかった。
「まさかとは思いますけど……護衛対象が、逆瀬女子高の生徒で、俺達に女子高に潜入しろ、とか言うんじゃないですよね。」
「……」
舞無の沈黙が、肯定を意味して居た。
一希は、雪華が来るまで舞無が依頼内容を話そうとしなかった訳が分かった気がした。
…雪華にフォローを頼む為だ。
その証拠に、さっきから舞無は視線で雪華に救援信号を送って居る。
その救援信号を受け取った雪華は、困惑半分、哀れみ半分、という様な表情で口を開いた。
「まあまあ、一希さん。一度着てみたらどうですか？一希さん自身の素材も良いですから、案外似合うかも知れませんよ？」
「いや、仮に似合ったとしても嬉しく無いですよ！！」
全くフォローになって居なかった。
と言うか、何処の世界に、女装が似合って喜ぶ男子高校生が居るんだ。いや、仮に居たとしても、もうそいつは確実に末期だろう。
精神的な意味で。
「でも、仕方ないじゃない。偶然この学生が当たっちゃったんだし。」
「舞無さんが開き直ってどうするんですか！？」

数分後。
一希が折れたーーー
舞無が実際に、ＰＭＣから来た依頼書を一希に見せ、雪華が仕事だからしょうがない、と必死にフォローした結果だった。
こうして、一希と雪華は、逆瀬女子高に潜入、護衛の任務に当たる

事となった。

第3話　事務所～依頼～（後書き）

注意……作者に女装癖は無いです。

一希が持つ拳銃と雪華の狙撃銃の名前募集します。コメントなどでお願いします。

まあ、コメントなかったら作者が考えますが…

ご感想、ご意見、お待ちしております。

第４話　二人の『かずき』（前書き）

考査が終わりました。
これからは、四日に一回位のペースで更新したいと、考えております。

第４話　二人の『かずき』

「このド変態。」

南ブロックの住宅街、其処に位置する一希の自宅。
事務所から帰って来た一希に対しての家人の第一声は、お帰り、など優しい物では無かった。
まあ元々、この家人にそんな台詞は期待していなかったのだが。
「帰って来るなり、いきなり酷いな、一姫…」
風見一姫。
それが一希の唯一の家族であり、たった一人の妹の名前。
ところが、兄妹にしては、容姿はかなり異なって居た。
只一点を除いては。
「何で女子高の制服を持って帰って来た変態に普通に接してやる必要が有るんですか。」
「兄を変態呼ばわりするな！！それに、これは俺が望んで持って帰って来た訳じゃねぇ！！」
一姫に変態呼ばわりされる原因となった、逆瀬女子高の制服が入った袋を振り上げ、一希は叫んだ。
すると一姫は哀れみを込めた目で言った。
「ああ、ＰＧＣを首になって、今度はオカマバーにでも就職するんですか。良かったじゃ無いですか、直ぐに再就職出来て。」
「……」
一生、この妹には舌戦で勝てないのだろうな、と一希は確信した。
「ところで兄さん。」
「何だ？」
「何時まで靴を履いて玄関に立ってる積もりですか？」

一希は未だ、玄関から上がれて居なかった。

夕食を食べた一希達は、テレビでニュースを見ていた。
今日もニュースは事故だの殺人だの、どうでも良い事ばかりを喋って居る。一希も一姫も、どんなニュースにも眉一つ動かさない。
一希は、ふーん、位にしか思わないし、一姫に至っては何とも思って居ないだろう。
人の一人や二人、傷付く事など、当たり前だと知っているからだ。
この世に於いて、『幸せ』と『不幸』の総量は常に一定だと二人は思っている。誰かが幸せになれば、誰かが必ず不幸となる。
故に、誰もが幸せな世界など存在しない。
何故なら、この世界では、身長や体重と言ったステータスですら、不幸となって自らに降り掛かって来るのだから。
一希はＰＧＣの仕事の中で、一姫は学校で、それぞれそれを知った。
否、自らの身を持って体験した。
だから、ニュースを一希は同情もせずに流すし、一姫は只それを『情報』として処理していた。

ニュースが終わると、二人はテレビを消した。
バラエティー番組にも、ドラマにも二人は全く興味が無い。
だから、二人は芸能人の名前など一人も知らない。
だが、その所為で、二人の生活に影響が出た事など無かった。なぜなら、一希の数少ない友人も芸能人関連の話は苦手で有ったし、一姫には、一希やその知り合い以外に会話する相手すら居なかったからだ。

テレビを消すと、一姫は戸棚から目薬を取り出し、目に差した。
「やっぱり痛むか？」
一希は目を閉じて居る一姫に声を掛けた。
「少し痒い程度です。問題有りません。」

そう言ってから開かれた一姫の両目はーーー紅に染まって居た…
一姫だけでは無い。
一希の右目も、紅に染まって居る。
勿論充血などでは無い。
もし充血なら、虹彩まで紅に染まる筈が無い。
医師に診てもらった事も有るが、詳しい事は分からなかった。
では、何時からこうなってしまったのか。それも定かではない。何故なら、二人には、五年から前の記憶が全く存在しないからだ。
一希に取っての最初の記憶は、この家の居間で、目覚めた事だった。
。
分かって居たのは、自分の名前と、両親は居ない事、そして、一緒に倒れて居た少女が妹の風見一姫だと言う事だけだった。
自分の右目と一姫の両目が紅いと気付いた事、月下舞無や彩萌雪華と出会ったのは、少し後の事である。
目覚めてから五年間、二人は必死だった。
生きる事に。
両親と言う名の庇護者は二人には居なかったので、生きる為の金は自分達で稼ぐしか無かったのだ。
結果、一希は高校生の身でも大金が稼げるＰＧＣの社員になり、一姫は家事でそれをサポートする。どちらかが、成り立たなくなれば、どちらも成り立たなくなってしまう関係。
信頼し、協力はしているが、互いに過度な依存はしていない兄妹の関係が、磐石な物に見えるか、不安定な天秤の様に見るかで、この兄妹の見え方は随分と違うだろう。

一姫の目に支障が無い事を確認した一希は、二階の自室へ向かった。
最低限の家具しか置かれて居ない部屋には、僅かな火薬の匂いが漂って居た。
一希はデスク脇の椅子に座ると書類をーーー事務所で、舞無から貰って来た依頼書を読み始めた。

今まで、一希が高校生と言う身で、数々の依頼を達成してきた原因の一つは、この情報整理に有る。
何をすれば良いのか、その為には、どんな武装で、どう動けば良いのか。不測の事態には、どう対応すれば良いのか。綿密なスケジュールを頭の中で組んでいく。
特に今回は、周囲にバレたら其処で終わりなので、何時にも無く一希は真剣だった。
幾ら渋ったとしても、やると決めたなら、真剣にやる。
それが依頼に対する一希のやり方だった。

書類を読み終え、情報を整理した一希は、部屋を出ると、向かいの一姫の部屋のドアをノックした。
「はい。」
「俺だ。入っても良いか？」
以前、ノックだけして入った時、酷い目に遭った事が有ったのでそれ以来一希は絶対に声を掛ける事にしている。
暫くごそごそと音がした後、答えが返って来た。
「どうぞ。」
開けた先には、一希の部屋と同じ様な飾り気が無い、最低限の家具しか置かれて居ない部屋が有った。
違う所が有るとすれば、一姫の部屋に置いて有るベッドが、一希の部屋には無いと言う事位だ。
一姫は、ベッドに腰掛け、小説を読んで居た。
「何の用ですか、兄さん。」
冷めた視線は相変わらす小説のページに落とされて居たが、一希は全く気にしない。
「いや、頼みが有るんだが。」
其処でやっと、一姫は顔を上げた。
「頼み？兄さんが私にですか？」
「ああ。……お前の名前を明日から貸してくれ。」

「は？」
全く予想して居なかった言葉に一姫は、豆鉄砲を喰らった様な顔をした。
「いや、明日から、逆瀬女子高等学園に潜入するんだが」
「変態。後却下。」
「何でそうなる！？」
最後まで言わせて貰えず、即答で返答と侮蔑の言葉の両方を貰った一希は、事情を知らない第三者から見れば確実に変態だった。
「覗きとかする為に潜入するんでしょう？確実に変態以外の何物でも無いです。」
「お前は俺をどんな風に見てるんだ！？」
「犯罪者。」
そう言って一姫は携帯を弄り始めた。番号を押している事から掛けようとしているのは…
「何通報しようとしてる！？」
「覗き魔の未遂の摘発ですけど。」
「違う！良いか、一姫。俺は明日から護衛任務で、転校生として、逆瀬女子高に潜入するんだ。雪華と一緒にな。だけど、そのままの名前じゃ不味いだろ？だから、俺はお前の名前を貸してくれって言いに来た。これで良いか？」
「……『依頼で』と言う言葉を付け加えて居ない兄さんが悪いんですよ。」
「……日本語って難しいね～」
はぐらかそうとする一希を一姫は追撃する。
「逃げないで下さい、それは只の現実逃避です。」
「……で、答えは？」
溜め息を吐くと一姫は言った。
「……余り、多様しないで下さいよ。」
「…悪いな。」
「仕方ないですよ、私達が生きる為ですから。…でも。」

「何だ？」
部屋を出ようと、一姫の言葉を背中で聞いていた一希は立ち止まり、振り返った。
一希の視線の先、其処には、さっきまでの冷めた視線から一転し、不安を視線に混ぜた一姫が居た。
「絶対に、無理だけはしないで下さい。」
それは、何度でも一希を変態呼ばわりする一姫の本心。
自分の為に、傷付かないで欲しいと言う、願い。
「…ああ、分かってる。」そんな一姫に対して、一希に出来たのは、言葉を返す事だけだった。
「じゃあ、兄さん。おやすみなさい。」
「ああ、良い夜を。」
そう言って、一希は部屋を後にした。

第４話　二人の『かずき』（後書き）

タイトル修正
『白紙の地図と高校生のＰＧＣ～ｈａｌｆ　ｒｅｄ　ｅｙｅｓ～』
に、投稿日から、一週間後１２月８日に変更します。
ご迷惑をお掛けします事を、お詫び申し上げます。

コメントをお待ちしています。

第5話　逢魔の時（前書き）

短いです。

第5話　逢魔の時

浅い眠りと深い眠り。
それらを繰り返す内に、気が付けば夢を見ていた。
夢だと分かる夢、つまり明晰夢と言う物を見ているらしい。
紅蓮と黒。
それが視界を埋め尽くす全てだった。
パチパチと何かが爆ぜる音と、怒号が聞こえる中で、黒煙や熱気が、身体を覆って行く。

目の前は、炎が支配していた。

逃げないと。
だか、その思いとは裏腹に、身体はその場から動かない。
パチパチと言う音に彩られ、全てが等しく炎の前で灰に変えられて行く光景。
此処が地獄で無いのなら、何処が地獄だと言うのだろう。
煙を吸い込み、激しく噎せた彼は自らの死を覚悟した時だった。
「ほら、起きて。」
声がしたが、彼は反応しなかった。
それが死に間際の自分に、掛けられた声だと分からず、幻聴だと思っていた。
だから、
「其処の貴方。起きて。」と、再度声を掛けられる迄、彼はその声に反応しなかった。
そして、その声が自分に向けられた物だと分かったとしても、彼は反応しなかった。
否、出来なかった。
彼の意識は既に深い闇の中に沈み掛け、声を出す事すら、叶わなか

ったのだから。
声の主は暫く黙って居たが、やがて溜め息を吐くと言った。
「まだ、貴方は死ぬべき人間じゃ無い。けれど、私に貴方の生死を決める権利は無い。だから、選びなさい。此処で灰になるか、それとも、私の手を取って生きるか。」
最早、身体一つ満足に動かせない彼に向かって、彼女は手を差し出した。

其処から先は、分からない。

「……また、出やがった。」
夢から目覚めた一希は、壁に掛けられた時計に目をやる。
夜光塗料が塗られた針は、午前二時を示して居た。
何時もの様に椅子に座って眠って居た一希は、電気を付けた。
屋上から飛び降りる勇気は有れど、悪夢を見て二度寝する勇気は、一希には無い。
一希は、寝る前に側に置いた鞄を引き寄せ、ファスナー開ける。
一見すると、外見中身共に一学生の鞄としか見えないそれの底板を一希は外した。

底板の下、其処には拳銃が収められて居た。

取り出した拳銃を一希は手で弄ぶ。
悪夢に起こされた時や、どうしても眠れない時に、武器を弄ぶのが、一希の癖だった。
一希に取っての睡眠は、それほど大切な物では無い。少なくとも、身体が拒否したのならば、無理にするべき事でも無かった。
紅と黒。
左右非対称の色をした目で拳銃を見つめながら、弄ぶ。

そうして居る内に、何時の間にか夜は更けて行き、護衛一日目の朝が来たーーー

第5話　逢魔の時（後書き）

コメント、感想等、お待ちしています。

第6話　護衛一日目　～邂逅～（前書き）

寒くなって来ましたね～
作者は寒いのが苦手です。土日は常に引きこもりです。

第6話　護衛一日目　～邂逅～

私立逆瀬女子高等学園。
通称、逆瀬女子高。
第四都市でも、一、二を争う設備と、歴史を誇る高校。
中央に聳え立つ時計塔が、この高校のシンボルとなって居る。
その時計塔の足元ーーー時計塔広場には、逆瀬女子高の制服に身を包んだ雪華が立って居た。
回りを同じ制服を着た他の生徒達が通り過ぎて行く中で、雪華は腕時計を約一分置きに見ていた。
「遅いですね、一希さんは…」
そう言った後、雪華は、傍らに立つもう一人の少女を見た。
彩萌雪華ともう一人の少女が其処で立ち止まって居る訳。
それはーーー
「本当にどうしたんでしょう、一希さんは。」
今日から共に任務に当たる一希が、待ち合わせの時間を過ぎても、現れないからだった。

雪華と少女が待って居る逆瀬女子高から、約五十メートル離れた地点の歩道。
其処を一人の少女が駆けていた。
否、少女では無い。
「まさか、準備に手間取る何て…」
声すら変わって居たものの、その顔には僅かな面影が残って居る。
そう、一希だった。
一希が遅刻した理由は簡単。
思って居たよりも、メイクに手間取ってしまったからである。
だが、遅刻しそうになるまで、時間を掛けたお陰なのか、一希は、すれ違った人間十人中九人ほどが振り返る程の美少女に変貌して居

た。
雪華と、護衛の対象者に対する、お詫びの言葉と言い訳を考えながら、一希は校門を走り抜けた。

「ーーー悪い、遅れた。」
既に人通りの少なくなった待ち合わせの場所には、当然ながら二人の姿が有った。
一人は言うまでも無く、彩萌雪華。
雪華は、長髪を何時もの様に軽く纏め、伊達眼鏡を掛けて居た。
足元には、恐らく狙撃銃が入って居るであろう楽器ケースが置いて居た。
そしてその隣に、一人の少女が立って居る。
背は低めで、一希よりも僅かに背が低い雪華よりも、更に低い背丈だった。
髪は、背と同じ様に短い。目は、何処か小動物的な印象を二人に与えた。
今まで彼女を見て、童顔ーーーと言う言葉を浮かべたのは、一希だけでは無いだろう。
中学生と言われても頷ける様な容姿だった。
昨夜、資料で写真を見て把握はしていたが、一希は自己紹介を兼ね、本物であるか確認する事にした。
「遅れてすみません。月下ＰＧＣ事務所の風見一希と言います。今日から、其処の彩萌雪華と共に、貴方の護衛に就かせて貰います。」
隣の雪華も一希に合わせ、頭を軽く下げる。
「あっ、すみません。私は、古手毬彗（こてまりすい）と言います。今日から宜しくお願いします。」
幼そうな外見とは、裏腹に、意外としっかりした性格の様だと一希は思った。
互いに自己紹介を終えた時、頭上の時計塔の鐘が鳴り出した。
「始業十分前ですね。…えっと、お二人は、理事長に挨拶しに行く

んですよね？」
「はい。」
「分かりました。理事長室は、一番校門から近い管理棟の二階の一番奥です。では、後程教室で。」
そう言って彗は校舎の入口へと駆けて行った。
彗が、校舎の中へと消えるのを見届けた後、雪華が切り出した。
「意外に、遅かったですね、一希さん？」
雪華は以前にも一度、一希の女装を見ているので、その変貌に大して動揺していなかった。
「メイクに手間取っただけだ。それよりも。」
一希は、困惑の視線を雪華に向ける。
「何で、舞無さんは、俺の服のサイズを知ってたんだ？」
その言葉の通り、一希の制服のサイズはぴったりだった。
「さあ…でも、舞無さんですから…」
そう返す雪華の制服のサイズも一希と同じ様に、ぴったりだった。
「あの人、プライバシーの権利って言う言葉を知って居るのか？」
「服のサイズがプライバシーに入るかは、結構難しい事でしょうけど…でも、知って居ると思いますよ。少なくとも、その言葉の意味は。」
二人して、溜め息を吐いた所で、一希はある事に気付いた。
「雪華さん、ペンダントは？」
何時も雪華は、写真が入るペンダントを掛けて居た筈なのだが。
因みに、写真の中身は、一希は勿論、一緒に暮らしている舞無でさえも見た事が無かった。
「ああ、あれは、制服の下に隠れる様に掛けてます。流石に、校則違反か分からない状態で、堂々と掛けて居るのもどうかと思いますから。」
そう言って、雪華は、首筋の襟に隠れたチェーンを引っ張って、持ち上げて見せた。
その指先には、確かにチェーンが掛かって居た。

「なら、行きますか。」
「そうですね。確か、校門に一番近い校舎でしたね。」
二人は歩き出したが程無くして、雪華が言った。
「思ったんですけど、あの人、高校生、何ですよね…？」
どうやら雪華自身も、一希と同じ事を感じたらしかった。

広大な敷地を持つ、逆瀬女子高。
その理事長室に二人は居た。
部屋には、如何にも高そうな調度品が置かれており、物を僅かしか置かない主義の一希に取っては、居心地は余り良い物では無かった。
思った所で、言う積もりは毛頭無いのだが。
「では、これから数日間、宜しく頼みます。」
そう理事長が締め括った時、見計らって居た様に、扉がノックされた。
「入りたまえ。」
扉が開かれた先に居たのは、白衣を来た若い男性教師だった。
「ああ、丁度良かった篝君。…紹介しよう。君達がこれから入って貰う二年A組の二神篝（ふたがみかがり）先生だ。」
「どうも、二神です。」
二神が頭を下げるのに合わせて、二人も頭を下げた。「なら、二神先生。後は任せましたよ。」
「分かりました。…なら行くか、えっと、風見に、彩萌。」
三人は、理事長室を後にした。

…一希達は気付いて居ただろうか。
理事長が冷たい目で、三人を見送った事に。

所は変わって二年A組の教室の前。
「えーっと、今日何か有ったと思うが…忘れた。」
あんた本当に教師として大丈夫か？と、二神の言葉が聞こえた一希

はーーー少なくとも一希はそう思った。どうやら、二神は恐ろしい程やる気無しの教師の様だ。
「転校生が居るって聞いたのですが本当ですか？」
中から聞こえた声で、教室がざわざわとし始めた。
「あー、転校生ね。うん。居るね。二人も。…おーい、入れば？」
普通其処は入れー、だろうと思ったが呆れ果てた一希には、何も言う気は起きなかった。
引き戸を開け、中に入ると、四十人の視線が照射された。
「えーっと…各々で自己紹介して席に座ってくれ。席は一番後ろの古手毬を挟んだ二席だ。向かって右側が彩萌、左側が風見だ。」
そう言うと二神は、教卓に突っ伏した。
二神もある意味凄いが、その教師の行動を平然と流す生徒達も凄いなと、一希は思った。
「風見一姫です。宜しくお願いします。」
「彩萌雪華と言います。宜しくお願いします。」

こうして、二人の任務は始まった。

第6話　護衛一日目　～邂逅～（後書き）

アクセス二百突破しました。有難うございます！！
これからも宜しくお願い致します。

第7話　護衛一日目　～異変～（前書き）

お待たせしました。

第7話　護衛一日目　～異変～

転校生が転校して来た初日、最もよく有るイベントが有る。
元々居た生徒ーーークラスメイトからの質問責めである。

一時限目。
授業時間であるにも関わらず、二年A組の教室は喧騒に満ちていた。
その喧騒の渦の中心は言うまでも無い。
「ねえねえ、風見さんって前は何処の高校に居たの？」
「彩萌さん、髪綺麗～！どんな手入れしてるの？」
一希と雪華だ。
そもそも、この臨時の質問責めが始まる事となった発端はーーーホワイトボードに『自習』と殴り書きし、教卓で居眠りする二神にある。
所謂、授業放棄だ。
先程のホームルームでもそうだが、二神の教師としてのやる気はゼロだと、一希はーーー正確には雪華もだがーーー確信していた。
こういう社会人を間違いなく、『給料泥棒』と定義するのだろう。
だが、二人に取って今は二神等の事を考えて居る暇は無かった。
「前は第４都市高に居て、両親の都合で此処に転校したんです。」
「えっ、髪ですか？そんな大した事はしてませんよ？」
二人とも、一対一、一対少人数の会話なら手慣れている。
だが、一対大人数の会話、それも、一方的な質問責めには慣れていない。
二神を気にするよりも、己に向かって来る質問に掛かりきりだった。
故に、一時限目終了のチャイムが、試合終了のゴングに聞こえたのは、満更聞き違えでも無かっただろう。
顔を真顔に戻すと、筋肉が引き吊った感覚がした。

「……やっと、お昼ですか…」
「そう…ですね…」
一時限目が終了してから、質問責めは弱まったが、完全に収まった訳では無い。寧ろ休憩時間を狙って、他クラスの生徒達が、A組の面々に代わり、質問責めに来たのだ。
その為、二人は今迄ーーー朝のホームルームから昼食時、屋上に来る迄、作り笑いを保つ必要が有った。
「月下じゃあ、あんな光景は有り得ないな…」
周りに人が居ない事を確認して、一希は口調を戻して喋った。
因みにこの高校では、屋上が解放されて居た。
だが、まだ時折冷たい風が吹く事も有ってか、屋上に一希達以外の人影は無かった。
「そもそも彼処では、私達は転校生では無いですからね。」
「この闘い、午後も続くと思うか？」
余り答えに期待せずに、一希は投げ掛けた。
「続くと思いますよ。寧ろ午後からの方が人が多いと思います。」
「誰かの救いの手とか、来ないかな…」
一希がそう呟いた時だった。
「お疲れ様です。」
その言葉と共にやって来たのは、彗だった。
手には、三本の紙パックを握って居た。
そして、その紙パックの二本を一希達に差し出して来た。
「すみません、有難うございます。」
「いえ、大した値段でもありませんし。」
一希は、素直にパックを受け取り、ストローを突き刺した。
ついでに、購買で購入したパンの包装を破き、一口口に運ぶ。
雪華や彗も、各々の昼食を口に運んで居た。
会話は無い。
一希も雪華も、基本積極的に話す方では無いし、彗も、何を話せば良いのか分からない。

だが、その沈黙が、二人に取っての本当の休憩になったのは、明らかだった。

「帰りの際の事なのですが。」
食事が三人とも終わった事を見計らって、雪華が切り出した。
「帰りは、何を使われますか？」
口調も先程一希と話して居た時の気を抜いた物から、変化して居た。
「普段なら、徒歩なんですけど、今日から家の者に車を寄越して貰う事になって居ます。…駄目でしょうか？」
「いえ、そちらの方が良いと思いますよ。徒歩だと、通り魔に襲われる確率は、恐らく上がるでしょうから。」
今迄に襲われ、殺害された被害者全てが、路上で殺されて居る。
車を使う事は、『路上で襲われる』と言う前提を覆す事が出来るだろう。
だからと言って、油断する様な甘さは、二人共持ち合わせて居なかったが。
「お二人は、車でも、付いて来られるのですよね？」「ええ。指令に、『対象の帰宅の確認』と言う項目が有るので、一緒に帰宅させて頂く事になると思います。」
「そうですか。なら、宜しくお願いします。」
彗がそう言って頭を下げた時、チャイムが鳴った。
「授業が始まりますね。急ぎましょう。」
一希は、生まれて初めてチャイムと言う物に、殺意を抱いた。

午後からの授業と、相変わらず激しい質問責めを潜り抜け、放課後がやって来た。
逆瀬女子高は部活動が盛んで、あれだけ群がって居たクラスメイト達は、各々の部活へと去って行った。
立ち去って行く前に、クラスメイト達に、部活動に勧誘されたが、二人共、この学校には、学生生活を送る為に来ている訳では無い。

二人は適当な理由を付け、上手くあしらった。
彗は、この高校では数少ない『帰宅部』所属なので、遅く迄学校に残る事は無い。
最も、通り魔が都市を騒がす様になってからと言う物の、部活動の時間短縮と言う措置がこの学校では、取られて居たのだが。
「なら、帰りましょうか。」
「ええ。」
三人は、学校を後にした。車を学校に横付けさせる訳にもいかないので、彗の家の車は、校門から少し離れた所に駐車して貰って居る。
一希は、学校を出る前に、鞄の底板の下に仕込んだ拳銃を太ももものホルスターに移した。
今までの状況から考えると、襲われるには僅かに時間が早いが、油断をする積もりは無い。
ＰＧＣである自分達に何時鉛玉が飛んできてもおかしく無いのと同様に、何時何が起こっても分からないのだから。

「此れが家の車です。」
「……」
「……」
校門から僅か百メートル。其処にその車は停車して居た。
「えっと、お二人共、どうしました？」
唖然とする二人を見てか、彗は問う。
「…いえ、まさかリムジンとは思わなかったので。」そう。
三人の前に停車して居たのは、一台のリムジンだった。
当然と言っては何だが、運転手付きだった。
「お帰りなさいませ、お嬢様。どうぞ。」
「ありがとう。」
運転手が開けたドアから、彗はリムジンに乗り込んだ。
その乗り方は、明らかに慣れて居ると確信出来る程スムーズだった。
「これは…」

「流石に予想してませんでしたね。」
何が有ったとしても、対応出来る様に考えて居た二人だが、まさかリムジンが停まって居るとは思わなかった。
「どうぞ、乗って下さい。」
彗の招きに応じて、一希達は、リムジンに乗り込んだ。
中は見た目よりも広く、ゆったりしている。
シートも慣れれば座り心地は良いのだろうが、慣れて居ない今は、落ち着こうと言う方が無理だった。
三人が乗り込んだ後、リムジンは発進した。
路面が良いのか、車が良いのか、ーーー恐らく後者だろうーーー揺れはほとんど感じない。
実は動いて居ないと言えば、信じてしまえそうだった。
「今日はお疲れ様でした。」
ある程度落ち着いたのを見てか、彗が頭を下げる。
「いえ、仕事ですから。…それに、まだ何か有った訳でも有りませんし。」
雪華が応じる。
「でも、お二人が居たお陰か、久し振りに安心して学校の敷地外を歩けましたよ。通り魔が現れてから、安心して街を出歩く事が出来なかったので。」
「そうですか。なら、良かったです。」
「明日からも宜しくお願いします。」
「此方こそ。なら、明日ですがーーー」
雪華と彗が話し込み始めたので、一希は窓の外に目をやる。
そこで、気付いた。
「…どういう事だ」
一希に取っては、呟きとも言える声も、車内では、問い掛けも同然だった。
「どうしました、一希さん?」
「雪華さん。確か車を使用した帰宅ルートは、学校が有る中央ブロ

ックから、住宅地の南ブロック迄のルートだよな。」
「…そうですけど？」
「それがどうかしたんですか？」
どうした急に、と言わんばかりの二人に一希は窓の外を見せた。
「なら、どうしてこんな所を走ってるんだ。」
「え…？」
「何で…？」
中央ブロックから南ブロックへと向かって居るのなら、窓の外に広がるのは、住宅地か、オフィス街でなければならない筈だった。
その筈がーーー
「何で、都市高速に乗って居るんだ？」
窓の外に広がって居たのは、騒音防止の灰色の壁だった。
「どういう事、ドライバー！！」
声を荒げる彗に返って来たのは、ドライバーの声とーーー
「すみません、お嬢様。こんな物が運転席に…」
一枚の便箋だった。
それに記されて居た言葉はーーー
『この車には爆弾が取り付けられている。爆破させたくなければ、時速七十キロで車を走らせろ。これを違えた場合、この車は爆破される。又、外部に助けを求めたりした場合も爆破される。
通り魔』
如何にも分かりやすい、脅迫状だった。

第7話　護衛一日目　～異変～（後書き）

本来、一つのパートにしようと思ったのですが、思ったよりも長丁場になりそうなので、二つに分ける事にしました。
急いだので、誤字脱字有るかも知れませんが、ご容赦下さい。

先日、予告した通り、１２月８日にタイトル変更致します。
新タイトル
『白紙の地図と高校生のＰＧＣ　～ｈａｌｆ　ｒｅｄ　ｅｙｅｓ～』
です。

第8話　護衛一日目　～脱出～（前書き）

遅くなって申し訳有りません。
私用で忙しかったので。

第8話　護衛一日目　～脱出～

自称『通り魔』からの脅迫状を受け取った一希達は、リムジンの後部、その中央に設けられたテーブルの上に広がる道路地図を見ていた。
「どうしましょう？」
雪華が現在地を指差し、言った。
その声には、何時もの様に動揺は含まれて居ない。
今更ながら、爆弾一つごときで慌てる様なほど、一希や雪華は一般人では無かった。
その所為か、車内には落ち着いた雰囲気が漂って居た。
「取り敢えず、このまま此処に居る訳には行かないな。」
今、リムジンは西ブロックの高速道路を走って居る。少なくとも、今の所は。
勿論、車は何時までも走り続けられる訳では無い。
ガソリンが切れたら、走れなくなり、脅迫状が本当なら、この車は爆破されるだろう。
「取り敢えず、残りのガソリンの量次第だな。……鳥遊さん、後どの位走れますか？」
一希は運転手ーーー鳥遊に声を掛けた。
「…この速度でこの量だと、持って後一時間ですな。」
「一時間ですか…」
今では殆どの車はハイブリッド化されて居るが、元々搭載されて居たガソリンが僅かだったのかも知れない。
一時間と言う少ない猶予で、四人が脱出する手立てを考えなければならない。
「…ドアを開けて、周囲の車に助けを求めると言うのは駄目でしょうか？」
恐る恐る、と言った様子で彗が言った。

「駄目だと思います。多分、その事も考えてドアを開けた瞬間に…」
「なら携帯で…」
「電波を探知されて爆破される可能性が有りますから、それも駄目だと思います。それに、」
雪華は一端言葉を切り、言った。

「脱出するにせよ、まず、周囲の車をどうにかしないと。」

前述した通り、此処は高速道路の上だ。
脱出しようとすれば、リムジンは、爆破されるだろう。
爆弾の威力が、分からない以上、周囲の車を巻き込む可能性が十分に有った。
「そもそも、爆弾は何処に有るんでしょう？」
「見たところ、車内には無さそうだな。」
リムジンに乗った時、一希はさりげなく周りを見たのだが、爆発物らしき物は無かった。
「もしかして、車外に有るんでしょうか？」
「まあ、どっちにしろ爆弾の時点で俺達に手は出せないけどな。」
銃火器の扱い方を知っている一希と雪華も、流石に爆弾の解除方法は知らない。そんな事が出来そうな知り合いは居たが、こんな状況では意味を成さない。
正に八方塞がり、と思えたその時だった。
「皆様。」
鳥遊が、静かに言った。
「車が居ない所で有れば、ございますが。」
「……鳥遊。それは何処ですか？」
鳥遊は振り返りーーー勿論運転中、立派な余所見運転だーーー地図の一部を指差した。
その指の先で差されて居たのはーーー
「これって…建設中の橋？」

「はい。」
誰もが言葉を失い、沈黙する。
「…其処には、どうやったら行けるんですか？」
「一希さん？何を言って居るんですか？」
いち早く混乱から回復した一希の言葉に、雪華と彗は更に混乱する。
唯一、ハンドルを握る鳥遊だけが落ち着いて居た。
「此処から直ぐの所に分岐点が有ります。其処を過ぎれば直ぐです。」
「其処に向かって下さい。」
「…お嬢様。宜しいですか？恐らく、車は只では済まないと思いますが。」
沈黙の中、鳥遊は自らの主に問う。
「…構いません。この車に爆弾が積んで有る以上、最悪、爆破される事も考えてましたから。」
「承知しました。」
二人の会話が終わると同時に雪華が切り出す。
「…で、橋まで行ったとして、どうするんですか、一希さん？」
「さっきから考えて見たんだが、このまま車で走り続けるのも、爆弾を解除するのも駄目なら、やっぱり『飛び降りる』以外に無い。どっちにしろ脱出しなければならないしな。」
「…時速７０キロの車から飛び降りる曲芸が出来る人間が、この世界に何人居ると思って居るんですか？私や一希さんならともかく、二人はどうする積もりですか？」
無謀としか思えない脱出方法は、雪華を不安にさせたらしかった。
一希は落ち着いて答えていく。
「雪華さんはケースから銃を抜いて、背中に掛ければ後はうつ伏せの体勢でケースを下にすれば怪我はしない筈だ。」
高校に潜入する為に、雪華は狙撃銃を入れたケースを楽器ケースに偽装して居た。しかし、楽器ケースと言っても、外見だけで、その実態は、耐衝撃、防水、防弾と、ケースだけでもハイスペックだ。

まあ、中に入って居る銃を考えれば、ケースを用意した人間が、ケースにすら、気を配るのも分かるのだが。
「分かったけど、彗さんや鳥遊さんはどうしますか？」
「私は自分で飛び降りましょう。そのくらいの事は出来ます。…風見様。真に申し訳有りませんが、お嬢様を宜しくお願い致します。」
「分かりました。なら古手鞠さんは、俺を下敷きにして飛んで下さい。」
その言葉に当然ながら、彗は困惑する。
人を下敷きに飛び降りるなど全く考えて居なかったからだ。
対する雪華は、まるで何も聞いて居なかったかの様に落ち着いて居た。
雪華は、そんな事位簡単に出来ると知って居たからだ。
困惑の表情を浮かべて居た彗は、二人の至って真面目な表情を見て、決心したらしかった。
「…なら、風見さん。宜しくお願いします。」
「喜んで、お嬢様。」
「…皆様、橋が見えて来ました。」
鳥遊の言葉に三人は窓の外に視線を移した。
全長一キロにも満たない橋が、直ぐ其処に有った。

工事現場のフェンスを突き破り、７０キロまでのマージンを取る為に、リムジンは僅かに加速する。
「後、五秒です。」
橋は建設途中で、中央の部分が僅かに繋がって居ない。なので、飛び降りると同時に、下の河へ落とす事にした。
もしかしたら、ドアを開けた瞬間に爆弾が起爆するかも知れないが、其処は賭けだ。
「後、四秒。」
雪華が狙撃銃を背負い直す。
「後、三秒。」

鳥遊はハンドルを片手に持ち返る。
「後、二秒。」
雪華と彗がドアノブに手を掛ける。
「後、一秒。」
一希は叫ぶ。
「ーーー今だ！！」
彗がドアノブを引くと同時に、一希は背中でドアを押し開け、飛び降りた。
制御を失った筈のリムジンは、事前に稼いだマージンを削って行き、見えなくなった。

数秒後、激しい爆発音と共に、噴水が上がった。

「…重い。」
「重くないです！！」
建設途中の橋の上。
一希は彗の下敷きになって居た。
自分が言い出した事とは言え、こうして見ると結構無茶が有った様に思える。
「すみません、取り敢えず降りて貰えませんか？」
束の間の開放感の後のーーー
「ぐふっ」
強烈な蹴り。
予想外の事に、一希は思わず本性で叫んだ。
「何しやがる！」
「重い、って何ですか！？重いって！！」
「いや、思わず…」
そう言った後、彗の表情が変わったのは、一希の気の所為では無いだろう。
実際、その直後、再び強烈な蹴りが一希を襲った。

『俺、何か悪い事言ったっけ…？』
薄れていく意識の中で、一希はそう自問した。

第8話　護衛一日目　～脱出～（後書き）

コメント等、お待ちして降ります。

第9話　護衛一日目　～帰還報告～（前書き）

お待たせしました。

第9話　護衛一日目　～帰還報告～

パサパサ、と言う音に目を開ければ、其処は何処かの、否、月下ＰＧＣ事務所の古びた天井だった。
上半身を起こすと、蛍光灯の光が目に滲みる。
「一希君、起きた？」
声のした方を見ると、其処には書類を捲る舞無が居た。
「…何で、俺事務所に居るんですか？」
「分からないの？」
「…はい。」
舞無は溜め息を吐く。
その姿は絵画の様だが、背景のひび割れた壁が残念だった。
「雪華が古手鞠さんを護衛して送った後、此所まで運んできたわ。…報告を受けたついでに、何で気を失ったか聞いたら、『自業自得です。』って言ってたけど、何が有ったの？」
「いや…」
言葉を濁しながら一希は、一つ気になる事を見つけた。
「舞無さん。ドライバー…鳥遊さんは？」
「…ダイバーが潜ったけど、確認出来なかったらしいわ…」
「…そうですか。」
一希は、ボロボロになった制服のスカートーーーまだ着ていたーーーを握り締める。
胸中を巡るのは、人を一人死なせた、否、殺したと言う慚愧の念。
その胸中を察したのか、舞無が呼び捨てた。
「一希。」
「…分かってる。」
『必要以上の同情はしない。』
あの日、目の前に居る少女に誓わされた言葉を思い出した。
「弱いなら、私の『刃』になれない。…それとも、貴方は…」

「心配無い。」
一希は寝かされていたソファーから起き上がる。
「あんたは、俺の『鞘』だ。何時までもな。」

「なら、俺は帰るぜ。」
「その制服で？無理でしょ？」
「え？」
一希は制服を見る。
白の筈の制服は、埃等で煤けて居た。
「背中も破れてるけど。」背中に手をやると、皮膚の感触がした。
見事に破れて居る。
「…どうするべきだと思う？」
「んー、そのままで良いんじゃない？」
「…何で？」
舞無は、背中を指差して言った。
「名誉の負傷見たいで私は良いと思うけど。貴方、たかが車から飛び降りた位じゃあ、怪我一つしないし。」
事実だった。
アスファルトとの摩擦で裂けた制服の下ーーー皮膚は擦り傷一つ負って居ない。雪華が一希を病院に連れていかず、事務所に持って帰ったのも、それを知っての事だった。

風見一希は、生半可な事では、傷一つ負えないーーーまるで化け物の様な人間だった。

「いっそ、明日から学校の制服を使っちゃ駄目か？スーツに似てるし良いだろ。」
「バレたら駄目と言う前提を忘れたの？駄目に決まってるでしょ。」
無論、一希はそれを知りながら言ったのだが、やはり駄目だった。
因みに、一希も舞無も裁縫は出来ない。

一希はそう言う事は、一姫に任せきりだし、舞無に至っては過去に一度挑戦した事が有ったらしいが、舞無は頑なに結果を話そうとし無かった。
と言うか、舞無は家事が出来ない。
「…仕方ないわ、雪華に預けて帰ったら？」
雪華は、この事務所では唯一裁縫と家事が出来る人間だった。
舞無が今まで生きて来れたのは、雪華が一緒に同居して居るからだと、一希は真剣に信じて居る。
「…そうしますよ。所で、雪華さんは何処に行ったんですか？」
一希はロッカーに仕舞ってある制服を取り出しながら聞いた。
「雪華？私に今日の報告した後、冷泉の所行ったけど。」
「…何時も思いますけど、あの二人は良く気が合うなと思うんですけど。」
「まあ、何処か通じる所が有ったんでしょ。」
そうこう会話して居る内に、一希は着替え終え、ーーー勿論、舞無の死角で着替えて居たーーー鞄を持った。
日が沈み、このブロックが、変貌する前に帰るべきだろう。
身を隠す為とは言え、舞無と雪華の二人が、この事務所に住んで居て、無事なのは一種の幸運だと一希は思って居た。
まあ、二人なら誰かが襲って来ても、返り討ちにしそうだが。
「なら、俺帰ります。」
「制服は明日の朝早くに取りに来て。雪華に縫わせて置くから。」
一希は、事務所を後にした。

時は少し遡る。
まだ、一希が目覚めて居ない頃。
「ーーー爆弾？」
「はい。」
一希を持って帰った雪華は、ーーー正確には、事務所の前まで、古手鞠の家の別の車に送って貰い、階段だけ持って上がっただけだが、

舞無は知らないーーー舞無に報告をして居た。
無事潜入出来た事、古手鞠の印象、そして、帰宅の車に自称通り魔からの爆弾が仕掛けられて居た事。その爆弾で、一人の行方不明者が出た事。
「爆弾って…通り魔は刃物しか使わなかった筈だけど。」
舞無は机の隅に積んであった書類の一枚をヒラヒラさせた。
其処には、今までの犯行の遣り方が書かれて居る。
「前例がそうだったので、車と言う手段の方が安全だと思ったのですが…油断しました。」
「…雪華。本当に通り魔の仕業だと思う？」
「思えません。」
即答した雪華の右手は、通り魔からの手紙を持って居た。
「個人の車に爆弾を仕掛けると言う手口に、この手紙。今までの犯行の手口とは、全く違います。」
「なら、どう思う？」雪華から受け取った手紙を見ながら、舞無はこの推理を楽しんでいるかの様に顔を緩めて居た。
他者が見れば不謹慎だと罵るかも知れないが、此処には、雪華しか居ない。
そして雪華は、全くそう言う事を気にする人間でも無い。
人が死んでも、必ず人は悲しむとは限らない。
「私達が護衛に付いた瞬間に、こんな事が起こるのは、事情を知って居た人間が何かしらの形で関係して居る筈です。」
「となると、理事長？」
「それに限った訳では有りません。ＰＭＣの方から漏れたと言う事も考えられます。」
「難しい問題ね。」
溜め息混じりに舞無がそう言った時、設定初期の音で、雪華の携帯電話が鳴り出した。
「はい。」
『ーーー』

「分かった。直ぐ行く。」十秒にも満たない通話を終え、雪華は携帯を閉じた。「爆弾の解析結果が出たそうです。今から行って来ます。」
「冷泉の所？」
「はい。ついでに銃の調整もするので遅くなると思います。何か有ったら連絡して下さい。」
そう言って雪華は狙撃銃の入った楽器ケースを持ち上げた。
ケースの片面は、飛び降りた時の摩擦で塗装が剥げて居た。
「気を付けて。」
「はい。」
雪華が事務所から出て行こうとした時、舞無は気になった事を尋ねた。
「そう言えば、何で一希君はこんな事になってる訳？」
「心配要りません。自業自得です。」
そう言って、雪華は事務所を出て行った。
「…何よそれ？」
静かになった事務所で、舞無は呟いた。

第9話　護衛一日目　～帰還報告～（後書き）

最近、とても眠いです。
次は、多分雪華中心の話になるかと。

第１０話　彩萌雪華と冷泉葵衣（前書き）

遅くなり申し訳有りません。
風邪をこじらせて寝込んでました。（現在進行形で寝込んで居ります。学校？出てますよ）
風邪には気を付けましょう。（引いた本人が言うな）

第１０話　彩萌雪華と冷泉葵衣

普段ならば、事務所の窓枠に腰を下ろして居眠りして居るか、銃の解体整備でもして居るだろう午後６時過ぎ。
事務所で爆弾の解析終了の連絡を受けた雪華はバイクを中央ブロックへと走らせて居た。
第４都市では学生と言う立場ならば、免許を取る事は許可されて居ない。
だが、ＰＧＣの社員ならば、仮に学生と言う立場でも、運転免許以外に、あらゆる免許を取得する事が認められる。
だからと言って、死傷者が多いＰＧＣの社員になる物好きな学生は数少なかったのだが。

とあるビルの地下駐車場にバイクを止めると、雪華は地下の入り口へと向かった。
入り口の側の詰所に居た警備員は、窓から拳銃片手に顔を出したが、近付いて来たのが顔馴染みの雪華と分かると、途端に顔を引っ込め、雑誌のパズルに再び取り組み始めた。
銃火器を所持して居るものの、顔を一目見ただけで、大したチェックもされず、あっさりパスされてしまうーーーそんな警備態勢を脆弱と取るか、余裕が有ると取るかで、物の見方は随分と変わって来るだろう。
雪華は全く関係無いと、考える事すらしなかったのだが。

ビルの中は、テロに因る制圧を恐れてか、異常な程に入り組んで居た。
そんな迷路の様なビルの中を雪華は勝手知ったかの様に進んで行く。
階段を上がったり降りたりを数回繰り返し、何階に居るのかも分からなくなった頃ーーー

雪華は、何も無い廊下の突き当たりで立ち止まった。事情を知って居る極々一握りの社員以外は、そもそもこんな所が存在して居る事すら知らないだろう。
雪華は財布からＩＤカードを壁に偽装されたコンソールに差し込んだ。
数秒の後認証が終わり、壁が二つに割れた。
その先には、とても人間の力では開けられないと一目で分かってしまう程の重厚な鉄の大扉が有った。
再び雪華はＩＤカードを差し込み、暗証番号を打ち込んだ後、小さなパネルに右の親指を押し付ける。
さっきよりも長い間が有った後、ピー、と言う音と共に大扉がゆっくりと開いた。
大扉が開き切ったその瞬間に盛大な爆発音が聞こえたが雪華は構わず歩を進めた。

厳しいセキュリティを通過した雪華の視界に入ったのは、白衣を着て忙しそうに動き回る十数人の男女。
「副所長！」
大扉を抜けて僅か数歩で雪華はその白衣姿達に囲まれた。
「お元気そうで何よりです。今日はどうなさいました？」
「葵衣から連絡を貰って来たんだけど。葵衣は？」
さっきの爆発音で、大体何処に居るかは検討は付いて居たが、念の為に雪華は聞いた。
「所長なら、多分実験室に居られますよ。」
「って事は、多分…」
「そうなりますね、お気を付けて。」
「有り難う。」
そう言って、白衣を受け取ると、雪華は奥へと進んで行った。
実験室のランプが『使用中』を示して居るのを確認した後、ＩＤカ

ードを使ってロックを強制的に解除する。ロックを解除された扉の隙間から漏れてくる空気には、僅かに火薬の臭いが混じって居た。
「葵衣居るー？」
「案外早かったね、雪華。」
雪華を出迎えたのは、白衣を着崩した同級生の冷泉葵衣（れいせん あおい）だった。
髪は切らずに放って置いた為にボサボサで、異常に長い。
背丈は雪華と同じ程度で、限り無く眠そうな目で、時間を持て余した、黒猫を思わせる。
きちんと身嗜みを整えればーーーそうする確率は遥かに０に近いだろうがーーー化けるタイプだろう。最もそうした所で、日頃彼女が行って居る行為の所為で、校内に於いて、彼女に人が寄って来る事は無いだろうが。
「またやってたの？」
「良いじゃない、芸術は爆発だよ。」
「だからって、気紛れで火薬に火を付けるのは止めた方が良いと思うけど。」
「此処で遣って居るのは、実験を兼ねた遊びに過ぎないさ。学校の連中は、私の事を『爆弾猫』（ボムキャット）と呼ぶけれど、あれは単なる部活動だ。」
「爆弾を作って爆発させる部活動が有ってたまりますか。」
そう。
月下高校内に於ける冷泉葵衣の渾名は、『爆弾猫』（ボムキャット）。
その所以は、彼女が『部活』と称しーーー一応、科学部の部長だーー校内で爆弾やら、火薬やら、『危険物』と名が付きそうな物を爆破する事に有る。
当然、文句を言う生徒も教員も居たのだが、全て彼女の言論の前に散った。
結果、彼女は忌避される存在となった。
そんな彼女と雪華がーーー否、強いて言えば、月下ＰＧＣ事務所が

関わりを持ったのは、僅か二年前。
誘拐された葵衣を葵衣の両親の依頼で、救い出した事が切っ掛けだった。
葵衣の家は、第四都市の銃器市場を独占する『冷泉銃工』で有り、葵衣は、社長令嬢と言う立場にも関わらず、今雪華が居る厳重なセキュリティに隔離された此処ーーー冷泉銃工試作研究所の所長を勤めていて、誘拐事件の犯人グループは、その試作品を狙って葵衣を誘拐したらしいが、そんな事は今はどうでも良い。
事件の後、葵衣は、せめてもの礼として、月下ＰＧＣ事務所に、銃火器と弾薬等の供給を行って居る。
そして雪華には、研究所の副所長としての権限と、（気にしては居ないものの、只単に、話し相手が欲しくて、何時でも此処に来れる様にする為だろうと、雪華は思って居るが）試作品の狙撃銃を譲渡したのだった。
その銃の調整等をして居る内に、救出対象と雇われ者と言う関係は友人と言う関係へと変化して居た。
自然と、雪華も此処だけでは、気を緩めて居たのだった。
「で、今日は何で来たんだっけ？『Ｗｉｎｄ』の調整だっけ？」
「呼び出して置いて良く言うね。爆弾の解析結果が出たって聞いたから来たんだけど。…まあ、次いでに此れの調整もしようと思ったのは確かだけどね。」
雪華は、狙撃銃の入ったケースを持ち上げる。
「ああ、そう言えばそうだった。なら、先に調整を済ましてしまおうか。」
はっきりした受け答えとは裏腹に、そう言う葵衣の目は、やはり眠そうだった。

スコープと連動したコンタクトレンズ型のディスプレイに、風向きや風速、距離、湿度、重力迄もが表示される。
それらの情報を確認しつつ、雪華は十字架を目標に合わせると、引

き金を引いた。
小さなマズルフラッシュと共に銃口から飛び出した弾は、正確に目標の真ん中を射抜いて居た。
その距離、１５００ｍ。
「何時見ても、ブレが無い。見事な腕前じゃないか。」
その声と共に、視界が再び、研究所の中へ。
当然、この研究所の中には、１５００ｍもの狙撃が出来るスペースは無い。
その為、何時も雪華は、機械を使用し、仮想空間での調整を行って居た。
「そうでも無い。この銃も大きさの割には軽いし、扱い易いから。」
「謙遜する物でも無いさ。この都市に、ブロだとしても、１５００ｍもの長距離を狙撃出来る人間が、幾ら居ると思ってる？」
葵衣は紙コップに入ったコーヒーを雪華に差し出した。
雪華は、コーヒーに口を付けてーーー噎せた。
「甘っ！？何このコーヒーとは思えない甘さ！？」
「甘い？結構控えたけど？」
噎せながらも、口に入れたコーヒーを雪華は何とか飲み下す。
「葵衣…角砂糖何個入れた？」
「四つ。結構控えめでしょ？」
「何処が控えめ！？せめて多くても二つでしょ？」
「え？私は五つ入れたけど？」
「論外！！」
角砂糖が四つも入れられたコーヒーは、本来の苦味を失い、最早『黒い砂糖水』とも言えるべき物体に変化して居た。
底には、溶け残った砂糖が黒く染まって溜まって居る。
幾ら葵衣が甘党でも、此処まで甘いと糖尿病になりたいと言って居る様な物である。
数分間に渡る論争の結果、雪華は、何とかコーヒーを淹れ直させる事を葵衣に同意させたのだった。

「で、爆弾の解析結果だっけ。」
声は些か不機嫌になっていたが、雪華が淹れ直したコーヒーに不満は無かった様だった。
その証拠に葵衣は、コーヒー（角砂糖二個入り）を口に運んで居る。
パソコンの画面には、やがて爆破された車の３Ｄ映像が現れた。
「使われた爆弾はＣ４爆弾。正確な使用量は爆発しちゃったから分からないけど、車の底に貼り付けられて居た見たい。」
別のウィンドウが開き、恐らく爆破される前の爆弾の３Ｄ映像が現れる。
「使用爆薬と仕掛けた場所以外に分かった事は、予告通り７０？以下になったら、起爆する速度制限爆弾だった事ね。ドアを開けても起爆はしない見たい。」
「その爆弾、一般人には…」
「無理ね。」
作れるの、と言う言葉を葵衣は切った。
「まず、この爆弾の設計図は、一般人には公開されて無いし、材料も一部特殊な物が有る。一般人じゃあとてもとても。」
「じゃあ、葵衣だったらどの位で作れる？」
「一時間、って所だと思う。」
「つまり材料が手に入って居て、設計図を知って居て、技術が有れば…」
「まあ、作れるでしょうね。」
「なら、これを見て。」
雪華は、逆瀬女子高の教職員リストを葵衣に差し出した。
「この中に、知って居そうな人は居る？」
無論、葵衣は逆瀬女子高の教職員等は知らない。雪華がリストを見せたのも、半分駄目元だった。
「まあ、調べて見るけど、あんまり当てにしない方が良いと思う。」
「駄目で元々だから。」

「ふーん。…そう言えば、今回はどんな厄介事抱えてるのさ。」
本来、ＰＧＣの社員は、情報漏洩を防ぐ為、仕事の内容を話す事は禁じられて居る。
だが、雪華は葵衣にだけは、話すようにして居た。
葵衣は、研究所に引き篭り易い割には、中々頭が切れるのだ。
「……通り魔が爆弾、ねぇ。」
「やっぱり、其処が気になる？」
「まあね。私の勘で良いなら、多分一筋縄じゃあいかないね、今回は。」
「それは分かってる。」
「それなら、良いんだけど。」
葵衣は、残ったコーヒーを飲み干した。

研究所を出た二人は、話しながら、地下の駐車場に降りて来て居た。
出口から見える外は、既に夜が訪れた事を告げて居た。
念の為に、チェックしたが、爆発物の類いは付いて居ない。
バイクのエンジンを起動させると、雪華は跨がる。
現在のバイクは、全て電気で動くタイプになっていて、音も静かなので、普通に会話が出来る。
「なら、気を付けて。」
「バイクの運転に気を使う程、下手糞じゃないから。」
そう言ってアクセルを入れようとした雪華に、葵衣は言った。
「…やっぱり、見つからないよ…」
端から聞けば、何を言って居るのか分からない葵衣の言葉も、雪華には当然の様に通じた。
「…絶対に、居る筈。第四都市には居ないかも知れない。…けど、必ず、この世界の何処かで、生きてる筈。だからっ…」
雪華は、何時も首に掛けて居る小さな写真入れを胸の前で握り締めた。
「だから…探して。何時か、見つかる迄。」

葵衣の返事を待たず、雪華はまるで逃げ出すように、バイクのアクセルを入れた。
小さなエンジン音は、駐車場を出ると、聞こえなくなった。
…それを見送る葵衣は、気付いただろうか。
さっき迄、雪華が居た場所、其処に一滴の水が落ちて居た事に。

第１０話　彩萌雪華と冷泉葵衣（後書き）

３５０アクセス突破しました。これからもよろしくお願いします。

次回予告

『月下舞無と過去の書類（罪）』（仮題）

第１１話　月下舞無と過去の夢（前書き）

Ｍｅｒｒｙ　Ｘ'ｍａｓ
お待たせしました。。

第１１話　月下舞無と過去の夢

絶叫が響く。
其れを聞く度に、人間はこれ程の大声が出せるのかと妙な所に関心を抱く。
たった一本の注射器。
その中で揺れる紅色の液体。
私は其れを手に取り、また『被験者』へ注入した。
痙攣と共に、絶叫の数がまた一つ増え、痙攣が終わると、一つ減った。
先程迄、『人間』だった『モノ』を見る。
今更ながら、『死』程度に、何の感慨も湧か無かった。
実験台の上の彼等から見れば、私達は紛れも無く、『加害者』なのだろう。
でも、私に取っては、彼等も『加害者』だ。
絶叫を聞く度に、感情が薄れ、段々自分が『人間』と言う定義から乖離して行く気がする。
彼等は、私に肉体を破壊され、私は彼等に、精神を徐々に蝕まれる。
肉体と精神。
否、生命と精神。
何と釣り合わない等価交換だろうか。
次の『加害者』が運ばれて来る。
私は又、注射器を手に取ってーーー

目覚めた。
中には夜の帳が降り、外はネオンの光と、酔っ払いの喚き声、娼婦の声に満ちて居た。
一希が帰った後、何時の間にか眠ってしまったらしい。
電気が付いていない事から、雪華はまだ戻って居ない様だった。

舞無は立ち上がり、背を反らした。
ゴキッと言う音に合わせて一種の開放感が訪れる。
「っ…」
月明かりとネオンの光に頼って、机の上の書類を片付け、電気を付けようとした所で、舞無は停止した。
それは、本当に小さな、けれども無視は出来ない気掛かり。
「私、電気消してたっけ…？」
自分が消した覚えは全く無い。
一希が消して帰って行ったと言う記憶も無い。
雪華はまだ帰って来て居ない。
一本だけなら未しも、全ての蛍光灯の寿命が切れたと言うのも考え辛い。
全く持って、おかしな状況だった。
取り敢えず、舞無は電気を付けようと、入り口近くのスイッチへ歩み寄る。
蛍光灯に照らされた事務所内は、一人で居る所為か、酷く殺風景に感じる。
そして、応接机の上に、見慣れない茶封筒が置いて有るのを舞無は見つけた。
裏表には、何も書かれて居らず、重さも軽い所為で、何が入って居るかは、判別出来ない。少なくとも、爆発物の類いでは無さそうだと、舞無は思った。
もし、仮に爆発物だとしても、解体する術を知らない舞無には、どうする事も出来ないのだが。
舞無は制服からペーパーナイフを取り出すと、慎重に茶封筒の口を切った。
「此れは…？」
中に入って居たのは、たった一枚の書類。
表面には、『ｓｅｃｒｅｔ』と判が押されて居た。
「ＰＭＣの送り忘れか？」

実際、古手鞠彗の護衛の依頼を受けるに（押し付けられるに）当たって、『ｓｅｃｒｅｔ』の判が押された書類が大量に送り付けられて来た。
勿論、読み終わった書類は一枚の例外を問わず全て灰にしたが。
だが、この茶封筒には、消印が押されて居ない。
それどころか、差出人はおろか、誰宛かも記されて居ない。
そもそもーーー
「どうやって、此処に入った？」
比較的物騒なーーー銃火器を振り回す高校生が言う事では無いがーー北東ブロックでは、家屋の入り口は、常に施錠するのが流儀だ。
当然舞無も、一希を見送った後に厳重に施錠した。
なのに鍵が開いて居ると言う事は茶封筒を置いて行った人間が、鍵を開けて入って来たと言う事だ。
ＰＭＣの人間や郵便なら、わざわざ鍵を開けて入って来る訳が無い。
と、言うか、開けられる様な施錠はして居ない。
其れを舞無に気付かれる事無く開けたと言う事は、余程の手練れだと言う事だ。つまり、
「私は、寝込みを襲われてもおかしく無かった訳か…」
舞無は苦々しい表情で呟き、椅子に座ると、書類に目を落とした。
書類を読み終わるのが早かったか、舞無の顔色が変わるのが早かったか。
「何で、こんな物が此処に！？」
舞無が驚愕するのも無理は無い。
その書類は絶対に此処に、否、この都市に有ってはならない物だったからだ。
舞無は立ち上がり、書類を掴むと、引き出しからライターを取り出し、キッチンへと向かった。
そしてシンクに水を張ると、書類に火を点けた。
隅から燃え始めた書類は、水に落としたインクの様にたちまち火に

包まれた。
灰を水で流すと、舞無は部屋に戻り、力無く椅子に座り込んだ。
そしてライターを取り出した引き出しとは別の、鍵が掛かった引き出しを開ける。
其処には、夢の中で見た紅の液体が入った注射器が一本、転がって居た。
舞無は其に触れ、手で優しく撫でた。
まるで、其処に其れが存在して居るのを確かめる様に。
「『半眼の抑止力（ｈａｌｆ　ｅｙｅｓ）』…」
舞無の口から呟きが漏れた。
その口調は懐かしむ、と言うより、何かを意識する様な口調だった。

舞無は電気を切ると、常に自分の机に立て掛けて有る日本刀を抜いた。
闇の中、一本の黒い刀身が姿を現した。
その黒は、闇よりも黒く、圧倒的な存在感を放って居た。
舞無は刀身を一度鞘に納めると、素早く抜刀した。
その抜刀は、速すぎて、空気を切る音すらしなかった。

「…私は、君の『鞘』になる資格なんか無いさ…」

暗闇の中、微動だにしない舞無の耳に、雪華が階段を上がって来る音が聞こえた。

第１２話　一希と一姫と贈り物（前書き）

お待たせしました。

第１２話　一希と一姫と贈り物

「ただいま。」

服は自分の月下高校の男子用の制服、顔は美少女と言う、ちょっとアレな容姿の一希は、一姫に因って『変態』だとかその類いの暴言が少なからず飛ばされて来るだろうと踏んで居た。
だが、予想に反して、暴言の類いは飛んで来なかった。
それどころか、一姫自体が出て来なかった。
「一姫？」
不審に思った一希は妹の名前を呼んだ。
暴言を一希に向かって吐く割に、何時も一姫は一希を然り気無く行動で気遣って居た。
帰って着たら、出迎えると言うのも、其れだった。
以外にも真面目な一姫は、病気で寝込んでも居ない限り、一希を出迎えに来る筈だ。
居ないと言う事も考えたが、一希は、外から家の電気が点いて居る事で、一姫が帰って居る事を確認している。
だからこそ、一希は『ただいま』と言ったのだ。
即興で考えられる状況は二つ。
一つ目は、何かの所為で、一希の声が聞こえ無かった場合。
二つ目は、本当に寝込んで居る場合。
三つ目は…あまり考えたくは無いが、家に誰かが押し入って居る場合。
念の為に一希は三つ目を選択した。
ホルスターに差した拳銃とは別の拳銃を鞄の底から取り出す。
弾倉のチェックを行う手が、一瞬震えた。
其れは、襲撃者に対する恐れでは無い。

一姫の安否も気になったが、一番恐れて居るのはーーー
「…大丈夫だ。あんな事にはならない。」
脳裏に浮かぶのは、あの日、ショックを受けた様な一姫の呆然とした顔。
其れを振り払うかの様に一希は拳銃を構えると、一歩一歩、慎重に進んで行く。

大して長くない廊下を進み、やがて、リビングの前のドアに辿り着いた。
ドアに填まって居るのは、磨りガラスで、中を覗く事は出来ない。
一希は左手でドアノブを、右手で拳銃を持ち、一気にドアを押し開けた。
「動くな。」
ドアを押し開け、拳銃を構える一希の目に入ったのはーーー
「…一姫？」

見慣れない植物の前で、微動だにせず、図鑑と睨めっこしている一姫の姿だった。

一姫には一つの悪癖が有る。
『読書狂』。
今、主流の電子ペーパーを除けば、其れが漫画で有ろうと、画集で有ろうと、参考書で有ろうと、英語で書かれて居る物でも、『本』と名が付く物ならば、読み始めたら最後、例え食事の時間になろうが（そもそも、食事は一姫が作って居るから食事の時間が訪れる事は無い）、徹夜しようが、地震が来ようが一文字一句に至る迄、読み終え無ければ動かない。
今は、部屋に一姫が居る時のみに限って、何とか其れを解決する方法を見つけたお陰で、昨日の夜、小説を読んで居た一姫と会話する事が出来たのだが、未だ解決策を知らなかった少し前に、一姫が分

厚い哲学書を読み始め、数日間部屋に閉じ籠った時、一希は餓死するのでは無いかと、真剣に心配した事が有る。
そんな、一希に取っては余り歓迎すべきでは無い癖を持って居る一姫だが、近年の書籍の電子ペーパー化に伴い、若干押され気味の書店からは、『一姫様、女神様』と慕われて居ると言う。
…最近、一姫が付けている家計簿から、月に万単位の金が巧妙に偽装されて消えて居るのと、一姫の部屋の本棚の本の冊数が増えて居る事に気付いて、その理由が分かった気がするが。

リビングでは、本の世界(あっち)から現世(こっち)に一姫の魂を帰還させる術を知らない一希が、一姫を放っておく事数十分。
その間に風呂に入ってメイクを落とし、ジャージに着替え、ソファーで目を閉じる一希の耳に、図鑑を閉じる、パタン、と言う音が入って来た。
「……兄さん？」
「ただいま、一姫。」
一希の存在に気付いた一姫は、少し驚いて居る様だった。
そして、手元に有る図鑑を見て、言った。
「私、又没頭してた見たいですね…」
「気にするな。…ところで、何で図鑑なんかと睨めっこしてたんだ？」
すると一姫は、溜め息を吐いて言った。
「…私が帰ったら、この植物が玄関に有ったんです。何の植物か分からなかったので、調べてました。」
「此れが？」
一希は、一姫の前に有る植物に目を遣った。
見た目は、鉢に植えられた植木である其れは、一希から見れば、花屋の類いに行けば、売っていそうな代物に見える。
「此れの名前は？」
「…『イトスギ』と言う見たいですね。特に此れと言った特徴は無

いですね。…只一点を除いては。」
「一点？何だ？」
「大丈夫です、大した事では無いので。」
一姫が何かを隠そうとしているのは明白だった。
「大した事じゃ無いなら、言えるんじゃ無いか？」
「……花言葉が、『死』だったんです。」
「…そうか。」
ＰＧＣの社員は、何かと怨みを買い、脅迫位ならしょっちゅうだ。
当然、一希も其の例外では無く、脅迫状等も何度か送られて来た事が有る。
だが、一姫の目に触れさせたく無かった一希は其れを一姫の目に触れる前に、始末して居た。
「気にするな。」
そう言って一希は、不安げな表情で『イトスギ』を見つめる一姫の頭に手を置いた。
其れが人の慰め方なんて知らない一希に出来た、たった一つの事だった。

一希が頭に手を置くと言う慰め（？）から十数分後。
何故かイトスギは、其れの何処を気に入ったのか分からない一姫の決定に因って、風見家のリビングに腰を下ろす事となった。
読書に没頭して居た一姫は、当然、未だ夕食を作って居なかったものの、三十分足らずで夕食を作り上げた。
そして、二人は今、夕食を食べて居る。
「そう言えば兄さん。今日の覗きは成功したんですか？返答次第に因っては、私は善良な一市民として通報しなくてはいけないのですが。」
「覗きじゃないって何回言ったら分かるんだ…？」
最早此処まで言われると、一希は悲しさすら湧いて来なくなって居た。

「ああ、なら盗撮ですか？以前にも私の部屋にカメラと盗聴機をーーー」
「何記憶を改竄してるんだ！？後、俺はカメラも盗聴機も持ってない！」
一希が必死に否定すると、元々一姫は冗談だったのだろう、追及を止めた。
「そんなに必死に弁解しなくても良いですよ。…それより、仕事は上手く言ったんですか？」
「ん？ああ、其れは問題無かった。」
流石に車に爆弾を仕掛けられて死に掛けた事は言わない積もりだったが、一姫が相手と言う意味で一希には運が無かった。
「嘘ですね。兄さんは嘘を吐く時、必ず眼が泳ぎます。」
「一姫、生憎だが、その手には乗らない。俺の眼は泳いで居ない。」
だが、一希にはやはり運が無かった。
「『ーーー今日、午後五時頃、都市高速の未開通区間の新大橋にて、爆発音の様な音がしたと住民から通報が有りました。爆発の原因は、工事中の事故で、この事故で一人が海に転落し、行方不明となって居ます。ＰＭＣ治安対策課はこの事故に付いてーーー』」
耳に入るか入らない位の音量で流されて居た嘘だらけのニュースに一希の箸が止まる。
そして、其れを一姫が見過ごす筈も無い。
「…兄さん？」
「…はい。」
「兄さん知ってますよね、此れ。」
無駄に鋭い妹だった。
「パス一。」
「却下。」
「…俺には黙秘権がーーー」
「有りませんよ、兄さんにはそんな物。」
今、一希の頭には、四面楚歌、や八方塞がり、や絶体絶命、と言っ

た言葉が泳いで居る。
そもそも、一姫に対して一希が物事を隠し通せたのは、指で数える程しか無かった。
抗うだけ無駄である。
「巻き込まれたのは、兄さん達ですよね？」
「…はい。」
一希は頭の中で白旗を挙げた。

「で、怪我は無かったんですね。」
「ああ。」
夕食後、事のあらましーーー勿論ニュースの言った嘘とは違うーーーを話した一希に、一姫はお茶を出して言った。
「車から飛び降りて、かすり傷一つ負わないってどういう身体してるんですか。」
「飛び降りた程度だろ。撃たれた訳じゃない。」
「程度って何ですか。程度って。」
一希は、自分が車から飛び降りた位では怪我一つ負わない事は言っていない。
せめて、此処では『一般人』で居たいと、そう思って居るからだ。
銃火器や何らかの凶器で傷付くのは『一般人』と同じなのだが。
「…とにかく、怪我人になる事だけは止めて下さい。死人になるのは論外です。」
「分かってる。」
一希も、自ら進んで棺に頭を突っ込む様な事には、出来ればなりたく無い。
「…なら、俺、朝早いから寝る。お休み、一姫。」
「…お休みなさい、兄さん。」
茶を飲み干し、一希はリビングを後にした。
部屋に戻り電気を付けると、一希はさっき構えて居た拳銃から弾倉

を抜き、銃口を見た。
蛍光灯の光りを反射して輝くシルバーの銃身の銃口近くには、小さな赤黒い染みが付着して居た。
其れの正体は言うまでも無い。
『血液』だった。
かつて銃身の大半に付着した血液は、拭き取っても唯一銃口付近だけ、落ちない。
その染みを見つめながら、一希は一姫の言葉を思い出した。
『大丈夫です、大した事では無いので。』
そう言って一姫は、何時も曖昧に誤魔化す事で、自分で全て背負って仕舞おうとする。
そんな事を続ければ、何時か壊れてしまう事を知りながらも。
だから、一希は逃がさなかった。
壊したくないから。大切だから。只其れだけの理由が、一姫一人に、否、一姫自体が背負い込む事を許さない。
異常な兄妹愛だの、過保護だの、シスコンだの言う奴が要るかも知れない。
だが、何と言われようが、一希は絶対に其れだけは許さない。
寧ろ、背負い込むのは、自分だけで良いと思って居る。
そう決めたのだ。
五年前の、あの日に。
そう、決めた。
目を閉じると、今でも鮮明に思い出す事が出来る。
叫び声、散らばった血液、転がる死体、そして、彼女達との血生臭い出会い。
今使って居る拳銃とは違う、五年前、目覚めた時から側に有った拳銃『ｃｒｏｓｓ　ｏｖｅｒ』（クロスオーバー）を始めて使った時の反動や硝煙の臭い。
「…あれは夏の暑い日の事だった。」
記憶の再生が、始まった。

第１２話　一希と一姫と贈り物（後書き）

多分次は、過去の回想です。

第１３話　逆鱗（前書き）

新年明けましておめでとうございます。
今年も宜しくお願い致します～

第１３話　逆鱗

兄妹が目覚め、出会ってから早二ヶ月。

「…何で私まで行かなくちゃいけないんですか。」
「たまには気晴らしに良いだろ。」
「私は家に居る方が気晴らしになるんですが。」
夏の昼下がり。
第四都市の中央ブロックにある駅前を二人は歩いて居た。
世界がたった五つの都市に分離してしまったと言っても、別に都市間の交流が無くなってしまった訳では無い。
その証拠に、今歩いて居る駅前広場には、他の都市から列車で来たのであろう、旅行鞄を持った人間がちらほらと歩いて居た。
「何で私がこんな暑い中歩かなくてはいけないんですか。」
もっともだ、とは、連れ出した張本人である一希も思う。
いくら夏と言っても、気温は３５℃を越えて居る。
『大戦』で地球温暖化が格段に進んだ所為なのか、平均気温は異常に上がって居た。
もう、冬に雪が降ると言うのは夢のまた夢なのである。
幸いにも、大戦に因る人口の減少と科学技術の発達のお陰で、温暖化の進行は今までと比べて比較的緩やかになって居るが、完全に止まった訳では無く、徐々に温暖化は進んで居る。
そんな暑さにも関わらず、一希が銀行に行く次いでに、一姫を連れ出したのは、一姫が学校に行く以外には、家に引き込もって居たからだった。
目覚めてからたった二ヶ月。
長いとも短いとも言えない微妙な長さの時間を共に生活すれば、ある程度の事は分かって来る。

……金銭的な問題ですら。

一の後に零が六個。
二人分の生活費や学費を考えると、通帳に記された残高は、お世辞にも十分とは言えなかった。
「…やっぱりバイトか何かしなくちゃな…」
残高として通帳に記載された百万円と言う金額は、中学生二人がまだ数ヶ月生活するのに十分な金額の様に見えるが、二人は目覚めてからまだ二ヶ月。
目覚めた時点で基礎的な教養は身に付いて居た割には、二ヶ月で五十万円を使い込んだと言う事が、二人の金銭感覚が異常に狂って居る事を示して居た。
余談だが、２０７０年現在の貨幣の価値は、『大戦』が始まる前遥か前ーーー２１世紀初頭とほぼ同じである。
「兄さん、それ一ヶ月前から言ってますよね。」
一姫も横から通帳を覗き込んで言った。
「俺も努力してるけど、年齢的に誤魔化せない。」
「兄さんは偽装なら得意でしょう。」
「一姫…二ヶ月の間お前は一体俺の何を見てきたんだ？」
一希がそう言った時だった。

「きゃあああああ！！」

悲鳴が上がった。
何事かと銀行に居た人間が声がした方を見た。
一希と一姫の二人を除いて。
一希は通帳を鞄に仕舞ってから、一姫は一希に合わせる様にして、叫び声がした方を見た。
即座に二人が振り向かなかったのは、一希は、直ぐに振り向く必要性を感じなかったーーーそれよりも通帳を鞄に仕舞う方が一希には

大切だったーーーからであり、一姫は、単に興味が無かったからである。
此処が自宅等のプライベートな空間であり、一希達以外の第三者が叫んだなら、（先ずその状況自体有り得ないのだが）二人は振り向く事すらせずに黙殺しただろう。
公共の空間に居たからこそ、二人は反応は遅かった物の、『普通の』人を演じた。
「動くんじゃねぇ！！」
一希達が見たのは、顔に覆面、手に銃器と言う、まさしく強盗と言えるであろう格好の男達がカウンターと待合室に向かって各々（それぞれ）銃を構えて居た。
客や銀行員達は一人残らず硬直（フリーズ）して居る。その様子は、強盗の指示に従って動かないと言うよりは、何が起きて居るのか理解出来ない、と言う物が大半だった。
無理も無いだろうな、と、一希は、半場他人事の様に思う。
此処に居る誰もが、『まさか、自分がこんな事に巻き込まれる訳がない。』と思い込んで居たに違いない。
何時何が自分の身に降り掛かるかを予測も出来ない癖に、『起こる訳がない。』と確信してしまう甘さ。
だからこそ、『甘さ』と言う言葉を言い換えた『希望』とか言う言葉が生まれーーー
「うおぉぉぉぉぉ！！」
決定的な、ミスを犯す。
警備員だろうか、制服を着込んだ二人の男が警棒を持って、カウンターの男を取り押さえようと、飛び掛かりーーー撃たれた。
パンッ、と言う拳銃の乾いた発砲音と、ガシャッ、と言うショットガンのポンプアクションの音が消え失せた時には、警備員達の身体は微動だにしなかった。
警備員達の身体の下から広がって往く海と、飛び散った紅い花弁に対する、沸き起こった悲鳴と、其れを黙らせようとする強盗達の威

嚇射撃の音、其れに因って、天井のＬＥＤ電球が割れる音を一希は全く聞いては居なかった。
正確には、その情報を興味が無い物として、頭に入れず、ゴミ箱のフォルダに突っ込んで居た。
何故なら、強盗達が何故そんな事をしたのか、考える必要が、彼等の腕、其処に彫られた刺青の蠍で分かってしまったから。
だから、序章で死んでしまった警備員二人に対し、一希は哀れみよりも、羨ましさを感じた。
彼らは、自分達が助からないと分かる前に、死ぬ事が出来たのだから。

『蠍（スコーピオン）』。
最近、第四都市を騒がせて居る銀行強盗である。
遣り口は至って悪逆非道。交渉に於いて、逃亡の手段等、自分達の要求が呑まれる迄、一時間に一人ずつ、一人が残る迄殺し、完全に逃げ終えた後、人質に取って居た最後の一人を殺害する。
また、全員を殺し終える前に、交渉に応じたとしても、やはり全員が殺されてしまう。
要するに、子供がおねだりする際に、駄々をこねる代わりに、人を殺す様なものだ。
既に百人近い犠牲者が出て居る状況に、住人達が打つ手が無いＰＭＣに対して、不満を募らせて居るのはまた別の話である。

ＬＥＤ電球や、外のイルミネーションの光が入って来る代わりに、赤色灯の紅い光線が入っては出て行く。
昼過ぎからの立て籠りは、既に夜となって居た。
闇に包まれた銀行の中は、三つのグループに分類されて居た。
奪う者と奪われる者、そして、奪われた者。
既に死人は、六人…否、警備員を含めれば八人に上って居た。
「ーーー今ならまだ間に合う！！人質を解放して、大人しく出て来

い！！繰り返すーーー」
そんな中の状況を知らないのか、其れとも、知って居りのか分からないが、馬鹿の一つ覚えの様に銀行の前に陣取るＰＭＣは降服勧告を繰り返して居た。

恐らく、今までもずっとこんな事を繰り返して来たのだろう。
そして、此れからも続けて行くのだろう。
仮に、何人死んだとしても。

「ーーー今ならまだ間に合う！！人質を解放して、大人しく出て来い！！繰り返すーーー」
「五月蝿いわね。」
「…そうですね。」
銀行の外、其処から更に一キロ程離れた商社ビルの屋上。
普段は立ち入り禁止となっている筈の其処には、二人の若い女性が、否、少女が居た。
少女達が各々手に持って居る得物の所為だろうか、本来、未だ残って居る筈の幼さが掻き消され、柔らかい雰囲気の中で何処か危険な香りが漂って居るのは。
「『ライセンス』はもう発行されて居ますよね？」
背中に背負った長い棒状の何かを下ろしながら、一本に括った長い髪をビル風に靡かせる少女は言った。
「発行されてるわ。今なら彼等に対して何をやっても法の外。」
「分かりました。なら後は任せて下さい。」
「期待してるわ。なら、私は、あの五月蝿いのを黙らせに行くから。」
そう言って、もう一人の少女は屋上を後にした。

「時間だ。」
再び長針が十二を指した。

最早悲鳴は上がらない。
もう六回も見せられれば、其れに慣れる事で、『常識』としてしまうのも、無理は無いが。
「今度は、誰を殺るかな～」
一ヶ所に集められた人質の回りを楽しそうな様子で歩く姿を見て、強盗達の目的は、金ではなく、殺しの方では無いかと一希は思った。抵抗する者と、無抵抗の者では、銃器を向け、一方的な力を行使する悦楽もまた違うだろう。
「良し、決めた。」
そう考えて居る間に、何時の間にか、吟味と言う名のルーレットは止まって居たらしい。
哀れにも、そのルーレットに選ばれたのはーーー
「嬢ちゃん、次はお前だ。」
一姫、だった。
選ばれたにも関わらず、一姫は、無視して窓の外を見て居る。
「おい、小娘。聞いてんのか？立て。」
「五月蝿いハゲ。」
今度は、銀行の中に居た全員（一希を除く）がフリーズした。
「……あんだって、姉ちゃん？」
数秒後、いち早く回復した強盗の一人が、拳銃を片手に一姫に詰め寄った。
「もう一回言わないと分からないなんて、最近の強盗は皆耳が遠い訳？なら、銀行に強盗に来る前に、耳鼻科に強盗に行きなさい。怠惰に時間を過ごしてる貴方達と、私の時間の価値を一緒にしないで。」
その言葉に、拳銃を持った強盗の腕が震え出す。
「…お前…自分の立場が分かってねぇ様だな…」
震えた腕、其処に握られた拳銃の銃口が、一姫の頭に押し当てられた。
もし、其のまま何も起こらなかったなら、一瞬後に、一姫はこの世

を去って居ただろう。
其れだけの勢いが強盗には有った。
だがーーー
気が付けば身体が動いて居た。
足払いを掛け、胸蔵を掴み、一希は強盗を押し倒した。
銃器を持って居る、と言う『甘さ』が味方し、一希達を拘束して居なかったが故に、出来た荒業だった。
「…肩が俺の妹に何してる。」
一希が纏って居たのは、純度１００％の殺気。
否、殺気と呼んでも良いかと思えてしまう様な空気だった。
それは、今まで散々人を殺め、そして殺める手段を持って居る他の強盗達をも近付けない様な空気だった。今更ながら強盗達は理解した。
自分達の、『甘さ』が決して触れてはならぬ物に、この少年の逆鱗に触れてしまったのだと。
「…待ってくれ、な？」
「五月蝿い。」
命乞いとも取れる言葉を即座に切り捨て、一希は、制服の上着で隠して居た拳銃を抜くと、銃口を強盗の眉間に押し付けーーー
「俺は生憎、貴様らと交わす言葉を持って居ない。」
引き金を、引いた。

第１４話　覚悟

パンッ、と言う破裂音の瞬間ーーー
紅い花が咲き、拳銃と一希を紅く染めた。
強盗の命を完全に奪い取った事を確認した一希は、ゆっくりと立ち上がった。
今、一希の中では、一つの疑問が渦巻いて居た。

一緒に生活をし始めて二ヶ月。
ある程度の親密感は有った物の、其れは単に、『同居人』と言う関係から来る物だと思って居た。
幾ら血を分けた兄妹と言っても、所詮は他人。
だから、別に死んでも良かった筈だ。
其の筈だった。
だが、一姫が殺され掛けて居る光景を見た瞬間、一希はショックを受け、無意識に身体が動いて居た。
一希の精神は今、破壊と殺人に対する一部の理性の箍が外れた所為で、軽い混乱状態に陥って居る。
殺人を犯す事に対して、全く抵抗感を抱かなかった。
寧ろ、嬉々として行った位だ。
まるで、幼い子供が新しい玩具で遊ぶかの様に。
そんな事よりも重要だったのはーーー
『この『妹』と言う関係の少女には、罪を犯してでも救う程の価値が有ったのだろうか？』
そんな、疑問の解は。

「…兄…さん…？」

そう小さく呟いた一姫の表情と、僅かに焦点が合っていない、紅の

目を見た瞬間、精神の落ち着きと共に導き出された。
「……ああ、そうか…」
この妹は仮令、どんな手段を講じても、自分が守って遣る必要が有る、と言う解が。
其れは、理論も存在しない、只の暴論だ。
だが、反論を返す者が居なければ、暴論もしっかりとした『理論』となる。
そして、当然ながら、一希に反論を返す者は皆無だった。

この瞬間、一希は決めた。一姫を守る為に、自分は如何なる業でも背負うと。
其れは、厳重に縛られた鎖の様な覚悟。
一希は、一姫を背にして、再びゆっくりと拳銃を構えた。

第１４話　覚悟（後書き）

ポイント、感想、コメントお待ちしております。

第１５話　少女との契約（前書き）

［報告］
小説のサブタイトルに、『第～話』と付けました。
また、『第１話　プロローグ１』の修正を行い、『第１２話　一希と一姫と贈り物』に於いて、一希の拳銃の名前を『ｃｒｏｓｓ　ｏｖｅｒ』（クロスオーバー）に変更しました。
ご迷惑をお掛けしました事を、謝罪させて頂きます。ｍ（　）ｍ

アクセス数が６５０を普通に越えて居ました。
何時も読んで下さる皆さま方、本当に有り難うございます。此れからも、宜しくお願い致します。

第１５話　少女との契約

「お、お前、自分が何したか分かってんだろうな！」
強盗達からは、先程までの勢いは消え失せて居た。
其れは、決して自分達に銃口が向けられて居るからと言う理由から来る物では無い。
気圧されて居た。
紅に染まった、たった一人の少年に。
何とか言葉を返せたなら、まだ良い方で、残りの一人は、腰が抜けたのか、座り込んで居た。
「何の事だ。」
その少年ーーー一希は、目の前の強盗の頭部に銃口を向け、言った。
「こいつは、俺の妹を手に掛けようとした。」
一希は足下に転がった死体を軽く蹴る。
「…だから、『処分』しただけだ。」
「な、なら、お前も其処の妹と一緒に処分してやるよ！！」
叫ぶ様に言うと、強盗はショットガンを構えた。
装填されて居るで有ろう散弾を喰らえば、一希は勿論、後ろに居る一姫も只では済まないだろう。
だが、一希は動じない。
動かない的でも、素人なら外すと言われる五メートル先、其処に有る眉間を正確に標準したままで。
数秒の後ーーー
二人の指に力が入りーーー
「ギャアァァァァ！！」
一発の銃声と、悲鳴が響いた。
銃は、一希が撃った。
悲鳴は、強盗が挙げた。
銃口から熱風と共に、放たれた弾は、強盗の頭部が有った所の空を

切り、壁にめり込んだ。
にも関わらず、強盗は、ショットガンを取り落とし、床に崩れ落ちて、喚いて居る。
その理由は、ショットガンの引き金、其処に掛けられて居る筈の人差し指を見れば一目瞭然だった。

人差し指は、引き金と共に、消し飛んで居た。

「お、俺の指がぁぁぁぁぁ！！」
指を押さえ、泣き叫ぶ強盗を、一希は虫でも見る様な目で眺め、再び引き金を引いた。
放たれた弾丸は、狙い通り頭を消し飛ばし、再び、血と脳が混じり合った紅と灰色の花を咲かせた。

銀行の中から、銃声が二回聞こえた。
「ーーーくそっ」
言葉と共に、拳を机に振り下ろす。
指にじんわりとした痛さが襲って来たが、無視した。
ＰＭＣの作戦本部。
其処に居る数人の人間は、何もせずに、静観して居る。
自分達の無力と、総司令部への待機命令に怒りを噛み締めながら。
「隊長、もう我慢できません！突入の許可を！！」
自分だってそうしたい。
だから、何度も、突入許可を仰いだのだ。
だが、総司令部は、楽観視して居るのか、それとも、只単に、現状を理解出来ない程無能揃いなのか、待機命令しか出して来ない。
「ーーー今ならまだ間に合う！！人質を解放して、大人しく出て来い！！繰り返すーーー」
頭の中で、プチッ、と何かが切れる音がした。
「五月蝿い！！勧告を止めさせろ！！」

「そうしてくれる？」
不意に、声がした。
「誰だ、お前は？」
其処には、何処にでも居そうな、制服を着込んだ一人の少女が立って居た。
鞘に入った日本刀を持って居る点を除いては。

「貴方が、この部隊の指揮官？」
「あ、ああ。」
思わず頷いてしまった。
「なら、これ。」
少女は、制服から一枚の紙を取り出し、渡して来た。
紙を受け取り、目を通す。
「……何だ此れは！？」
その紙は、総司令部からの指示書だった。
以後、この少女に全権を委譲せよ、と言う内容の。
「指示書だけど？」
見て分からないのかと言う口調である。
「そんな事は分かって居る！！総司令部から全権を委譲されるお前は一体何なんだ！？」
そもそも、此処まで来るのには、規制線が張られて居る。
其所を何の騒ぎも起こさずに通って来たのだから、只者では無い筈なのだが。
そんな怒声を少女は何処吹く風と受け流し、言った。

「只の、女学生よ。」

そして少女は歩いて銀行の中へと入って行った。

「ああ、もしかして、もう片付いてた？」
二人目を『処分』した一希の耳に入ったのは、そんな声だった。
声に反応して、振り向いた一希が見たのは、鞘に入った日本刀を持った、制服姿の少女だった。
「誰だ、あんた。」
一希は突如現れた少女に対して、警戒を緩めない。
一希は、一姫を背にして、三人が一直線上に位置する様に移動する。
すると、少女は歩きながら、
「まぁまぁ、その話しは、残りを片付けてからで。」
と、言って、残り一人となってしまった強盗の前に立った。
「ま、待ってくれ…自首でも何でもするから、い、命だけはーーー」
「残念だけど。」
そんな強盗の命乞いを、少女は遮って言った。
「私達は、『ライセンス』を発行されて居るから。」ライセンス。
頭文字を取って、通称『R』とも呼ばれる。
此処で言うライセンスとは、決して免許などの事では無い。
裏の法律に存在する、強制力を伴った許可証。
其れが意味するのは、『リスト』に指定された標的の抹殺。
手段は問われない。
合理的な死刑よりも、残酷な死刑判決。
つまり、少女が言ったのは、事実上の死刑宣告。
其れを聞いた強盗は、今更ーーー本当に今更だーーー声にならない悲鳴を上げて、逃げ出した。少女に無防備な背中を見せて。
もし、強盗が苦し紛れに銃を撃ったなら、結果は変わって居たかも知れない。
だが、現実はそうならなかった。
「月下流抜刀術三の型ーーー『朧月』」

第四都市を騒がせて居た強盗団は、この瞬間全滅した。

「あんた、良いのか？」

あれから約一時間後。

既に人質は解放され、人も居なくなった銀行内。

其処には、一希と二人の少女の三人だけが残って居た。

人質の救助活動の間、側で二人の話を立ち聞きして居ると（決して、一希に何かしらの悪意が有った訳では無い。）、どうやら、強盗の指を狙撃で吹き（撃ち）飛ばしたのは、この、長い髪を括った少女らしい、と言う事が分かった。

一希は、他の人質達と外で医師の診断と記憶の削除（希望者のみ）を受けて居るであろう、一姫の様子を見に行きたかったのだが、残る様に言われたのだった。

「何が？」

日本刀を持った少女が言った。

「容疑者として、逮捕しなくて。」

殺人の善悪に付いては、一希は聞かなかった。

自分も人を殺したし、もし、少女が殺人を悪と考えて居たなら、殺す事は無かっただろうと推測したからだ。

「ああ、別に良いよ。あいつ等は、『リスト』に登録されてたし、殺せ、って命令したのは、依頼人だし。」

『リスト』。

其れは、『ライセンス』と併用される物で、裁判の前から、死刑が確定して居る程の犯罪者が載って居る物で、其れが意味するのは、『捕まってもどうせ死刑なら、捕まえずに殺しても良い。』と言う物だ。

但し、殺害するならば、ＰＭＣが殺害対象に対して発行する『ライセンス』が必要となる。

そして、『リスト』が『ライセンス』と異なって居るのは、一般人に公表されて居るか居ないか。

『ライセンス』は公表されて居ないが、『リスト』は法律として公表されて居る。
但しその場合、『リスト』の説明は、「一定基準を越えた凶悪犯を逮捕せず、やむを得ず殺害した場合、其れを合法的な死刑執行とする。」と言う生温い（？）物となって居る。
生死に関わる法律の為、廃絶を叫ぶ声も大きいが、今の所改定されそうな様子は無い。
取り敢えず、『リスト』と言う言葉を側に置き、『依頼人』と言う言葉に対して一希は聞いた。
「依頼人？じゃああんた達は…ＰＧＣなのか？」
学生の身で武装して居る（一希もだが）のを見た時から薄々浮かんでいた職業を一希は口にした。
「まあ、そうなるわね。」少女はそう言って髪を掻き上げた。
「其れより、貴方は？」
「あ。」
すっかり失念していた。
「俺は、風見一希だ。職業は…学生？」
「何で疑問系なのよ…」
少女は呆れた様に言った。
「…あんまり自覚無いんだよ。」
何時の間にか所属していたのだから無理も無いのだが。
「引き籠り？」
「……全然違う。」
「じゃあ、ＮＥＥＴ（ニート）？」
「……」
何でも格好良く言えば良い物では無い。
「何でそうなるんだ…」
「雰囲気を見て。」
何時から雰囲気でそんな事を見抜く時代になったんだ、俺が目覚める迄にこの都市（世界）に何が有ったんだ、と一希は思った。

「…で、話しって何だよ。」
話の脱線を感じた一希は、本来の用件へと戻す。
「ああ、それね。……えっと、もしかして一希は、俗に言う『シスコン』か？」
茶か何かを口に含んでいれば、瞬時に吹き出して居ただろう。
呼び捨てにされた事は、もう、どうでも良くなった。
「…帰って良いか？」
「駄目。」
「なら真面目な話をしろ。俺も暇じゃ無いんだ。」
「…冗談が通じない人ね。…まあ、良いわ。」
少女の纏う空気が変わった。
「私には、『刃』が無い。」
「ちゃんと有るだろ。」
一希の言葉通り、日本刀は、確かに鞘に収められた状態で、少女の手に有った。
「違う。この刀の刃じゃなくて、私と言う『鞘』に収まる『刃』の事。」
まだふざけて居るのかと思ったが、少女の目は真剣だった。
「其処のもう一人じゃ駄目なのか？」
「駄目です。」
髪が長い少女が言った。
「私では、役不足です。」
その言葉は、謙遜等では無く、確信を持って言われて居た。
「其処で、一希に頼みが有るの。」
此処でから先の話の流れだけで、先の内容が分かった気がした。
「私の『刃』になりなさい。」
懇願では無く、命令なのか、と思ったが、其処の部分は黙って居る事にした。
「…つまり、お前の所で、働けって事か？」
「言い換えると、そうね。…で、どうする？」

「…メリットは？」
「たまに命を掛ける必要が有るけど、高収入。」
「ハイリスクハイリターンかよ…」
一希の呟きは、華麗にスルーされた。
「後、今までの犯罪歴の取り消し。これは、私が勝手に遣っとく。」
「犯罪歴の取り消し？其れは、別のＰＧＣ（ところ）に入っても有るのか？」
「いや。私が勝手に揉み消す。」
「…其れ、不正じゃないか？」
「別に。不正なんて、この都市なら、一枚捲ればゴロゴロ転がってるけど？」
「そんな物なのか？」
「そんな物よ。」
一希は急に、政治家（この都市では、主にＰＧＣの幹部を指す。）が信じられ無くなった。
元々、信用等、一欠片も無かったが。
±０が若干一に傾いた様な物だ。
「でも、俺は犯罪歴は無いぞ。」
「何言ってるの。」
少女は溜め息を吐き、転がって居る死体を指差した。
「殺人罪、良くても過剰防衛、後、銃刀法違反。立派な犯罪歴持ってるじゃない。」
「……」
犯罪歴に立派だとかそう言う評価は無い。
「裁判は受けられるだろうけど、長期間の懲役か、悪ければ死刑は免れられないわ。」
「…其れを、揉み消すと？」
「そう。」
一希の頭の中には、天秤が浮かんで居た。
一方には、少女、そしてもう一方には一姫。
天秤は、一姫に傾いた。

一希に取って、別に懲役はどうでも良い。
二ヶ月を無かった事にして、未だに眠って居ると思えば良いからだ。
だが、一姫が居るならば、話しは違う。
あの呆然とした表情と、動揺の所為か、僅かに焦点が合って居ない目を思い出した。
大戦のお陰で発展した今の医療技術でも、記憶を完全に封じるのは難しい。あくまで、ＰＴＳＤを防ぐ為の一時的な処置だ。『何か怖い事が有ったけど、思い出せない。』と言う様な感じになる。（余談だが、現在の洗脳技術も、これを発展させた物だ。）
だが、耐性や記憶の強さによって、消去出来るかはまちまちとなってしまう。
だから、一姫の記憶消去が上手く成功して居なかった時（一希は記憶の消去を受ける積もりが無いが一姫には受ける様に言った）、側に居る事が大切だろう。
側に居る人間が、人殺しをした兄であったとしても。
其れに、一姫を守り続けるならば、力も金も必要だった。
結論は出た。
「……分かったよ。」
真剣な目で、少女に目を合わせた。

「俺は、あんたの『刃』になる。」

少女は笑みを浮かべた。
「契約成立ね。」
その言葉と共に差し出されたのは一枚の紙。
「これは？」
「事務所の住所。二日後に来て。」
「分かった。」
そこ迄聞いた時、一希はふと、有る事に気付いた。
「そう言えば、名前は？」

「…ああ、忘れてた。この娘(こ)は、彩萠雪華。其れからーーー」
少女は雪華を人差し指で指した後、自分を指す。
「私の名前は、月下舞無。改めて宜しく、風見一希。」
其れが、一希と舞無と雪華、三人の出逢いだった。

「兄さん。」
事後処理の為に残ると言った二人と別れ、銀行の外に出た一希を待ち受けて居たのは、一姫だった。
「一姫。」
一姫の目が焦点をしっかりと結んで居るのを見て、一希は取り敢えず胸を撫で下ろした。
「兄さん、帰りましょう。もう、遅いです。」
「そうだな、帰ろう。」
二人は家路に付いた。
一希は此処で気付くべきだった。
人は、自分が思って居るよりも、騙され易いと言う事に。
一姫の記憶が全く消えて居なかった事を一希が知るのは、この日から五年以上より後の事となる。

第１５話　少女との契約（後書き）

ご意見、ご感想、御待ちして居ます。

第１６話　護衛二日目　～悪癖～（前書き）

学校からの投稿です。
学校の校舎がボロいので寒い。

第１６話　護衛二日目　～悪癖～

誰にでも悪癖は有る。
例えば、一姫には、本を読み始めたら止まらないと言う悪癖が有るし、一希は、椅子に座らないと眠れないと言う悪癖が有り（だから、一希は部屋にベットを置かない。）、冷泉葵衣は、感極まると、校内で普段より盛大な爆発を起こす。
だからと言って。

「今日に限って流石に此れは無いだろ…」

まだ、高校生が活動を始めるには、まだ早いで有ろう早朝五時半。
一希は、雪華が仕立て直して居るで有ろう制服を、事務所に取りに来て居た。
合鍵で入った事務所、自分のロッカーに掛けられた制服は、しっかりと直されて居て、昨日の解れや裂けは、跡形も無い。
問題は無かった。
有る一点を除いては。
「すぅ…すぅ…」
ソファーの上で、ブランケットにくるまり、規則正しい寝息を立てて居るのは、雪華。
「すぅ……すぅ…すぅ…」
対して、反対側のソファーの上で、何も掛けずに、規則正しいとは言えない（？）寝息を立てて寝ているのが、舞無。
そんな二人に共通して居るのが、顔がうっすらと赤くなって居る事（特に雪華はかなり赤い）、そして、ソファーとソファーの間に有る応接机に二つのコップと、二本のビン、数本の缶が置かれて居る事、そして、缶には、一部部分に全て同じ言葉が書かれて居る事だった。

『お酒は二十歳になってから』ーーー

「……」

飲酒。

其れが二人の…と言うよりは舞無の悪癖だった。

自分一人で飲むのなら別に構いはしないのだが、舞無は、酔った勢いで、雪華にも酒を勧める（と言うより、飲ませる）。そして、極端に酒に弱い雪華は、舞無に押し切られて飲み（飲まされ）、飲んだ翌日は少なくとも十一時頃になるまで起きれない。所謂、二日酔いだ。

一希は、何度も、せめて飲むなら少しにしろと言って居るのだが、舞無は『酒は百薬の長』と言って譲らない。

机の上のビンや缶を見る。

此れだけ飲めば、百薬どころか、百毒だ。

取り敢えず、今分かる事は。

「今日は、護衛は無理、か。」

昨日あんな事が有った以上、これ以上の失態を重ねる訳にはいかない。

其れを考えると、雪華を無理矢理動かすより、今日は自分一人でやった方が良いだろう。

そう思いながら、一希は、換気をする為に、窓を開けた。

お世辞にも新鮮とは言えない北東ブロックの空気が、まだ薄い日の光と共に、酒の匂いに痺れた肺に、染み込んだ。

一希は溜め息を吐くと、改めて、窓際ーーー雪華の指定席から、事務所の中を見た。

ソファーの上で眠り続ける二人。

そんな二人を見て居ると、思わずこの世界が平和な物に思えてしまう。

だが、二人は実際に武器を手に取って仕事をして居る。

依頼人から与えられた殺人の権利と、命令で、己が手を汚した事も、一度や二度では無いだろう。
今迄に数人しか殺した事が無い一希でさえも耐え難い慚愧の念に晒される。
仮令、其れが悪人だとしても。
しかし、この二人は自分を遥かに越える量の罪を背負い、其れが償いで有るかの様に、第四都市の片隅に有るこの事務所にひっそりと同居して暮らして居る。
そんな思いが枷となり、平和に見える第四都市の景色をまるで芝居の背景の様な希薄な物に変え、僅かに一希の心を重くするーーー
「ん…」
ソファーの上で、雪華が小さく寝返りを打った。
その所為なのか、解いた長い髪の一部と一緒に、留め金が緩んで居たのだろう、細い銀の鎖の小さな写真入れ（ロケット）が首から落ち、小さな音を立てた。
その音で我に帰った一希は、窓枠から腰を下ろし、其れを拾った。
細工の細かさが、安物では無い事を、各所に付いた細かい傷が、身に付けてから長い年月が経って居る事を示して居た。
一希は、ロケットを見つめた。
中に入って居る写真は、一希も舞無も見た事が無い。
其れを暴く事には、多少の興味が有ったが、一希は、其れを実行に移そうとは思わない。
一希が一姫を譲れない物で有る様に、そのロケットに入って居る写真も、雪華に取って、譲れない物では無いかと思えたからだった。
でなければ、中身を見せない所か、身に付ける事すらしないだろう。
結局、一希は中を見る事無く、静かにロケットを机の上に置いた。

二人の死角で制服を着替え（と言っても、二人は寝て居るので、死角も何も有った物ではないが）、メイクをして、変声ガスを吸い込み、『風見一姫』となった一希は、雪華の目の前で雪華の携帯に、

今日は自分一人で護衛に付くと言う旨のメールを送った。
本人の目の前で、メールを打つと言う行為に、奇妙な感覚を覚えながらも、マナーモードの雪華の携帯が震えた事を確認し、一希は事務所を出て行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7675y/

白紙の地図と高校生のＰＧＣ ～half red eyes～

2012年1月12日12時49分発行